



ペスト病ノ原因調査第壹報告

第一 概況
 第二 調査の経緯
 第三 調査の結果
 第四 結論

世宗廟 世宗廟 世宗廟

世宗廟

會告

◎北里青山兩博士一行歡迎會は本月七日の委員會に於て

左の如く議決せり

- 第一會場 東京本郷區帝國大學圖書館
 - 第二會日 明治廿七年十月十四日
 - 第三會場ノ式 祝辭ヲ朗讀シ兩博士ニ半身銅像ヲ贈呈シ其一行諸君ニ彰功狀ヲ贈呈ス
(茶菓ヲ供スルノ外會食等ノ設ケナシ)
 - 第四 歡迎會員 廣ク同志者ヲ全國ニ求ム
 - 第五 歡迎會員集金 各人五圓以下五拾圓以上トス但特別寄附金ハ此限ニアラズ
 - 第六 賛成申込及送金 十月十日限トシ其名宛ハ東京市京橋區宗十郎町七番地大日本私立衛
生會北里青山兩博士一行歡迎會事務所トス
 - 第七 爲替受取人ハ右ノ事務所宛トシ郵便爲替ハ芝口郵便支局ニ振込アルベシ
 - 第八 學會及其他ノ團體ニ於テハ其會員中ヨリ申込及送金ヲ取纏本會ニ通信アラントテ希望ス
 - 第九 集金 第百銀行ニ預ケ入レ歡迎會結了ノ上其收支計算ヲ報告スヘシ
- 右の決議中第八項に因り本會は會員諸君の輿望に依り廣く吾會員中より釀出する義金を聚集し明治講醫會なる團體を以て歡迎會に送金せんと欲す有志の諸君は拾錢以上適意の寄附あらん事を望む其寄附金額及氏名の順次本講義録に掲載して之を廣告すべし

會員 諸君

明治講醫會

黒死病原因調査の成績は調査主任北里青山兩博士歸朝後の今日醫師と局外者の別なく齊しく聞かむとを願ふ處にして殊に會員諸君よりも續々御問合之向も有之候際恰も好し此程北里博士より「ペスト」病の原因調査第一報告と題する冊子二部を一は本會藏書用として一は會員諸君へ寄贈品として贈與相成りたり然るに一々御廻覽に供し候は當に手数と時日を要するのみならず自然其惠に浴するの遲速あるを免れざるを以て今之を本講義録に掲載し儕く會員諸君の研究に資し同時に北里博士の厚賜を拜謝す

編者敬白

○「ペスト」病ノ原因調査第一報告

明治廿七年七月七日香港ニ於テ

醫學博士 北里柴三郎

本年明治二十七年西曆一千八百九十四年ノ初ニ當テ清國南部廣東ニ「ペスト」ノ流行ヲ見尋テ五月ノ頃ニ至リ其餘殆延テ鄰地香港ヲ侵セシヨリ茲ニ亦毒炎ヲ逞フシテ今日ニ至ルモ尙ホ未タ勢ノ終熄ヲ見ス

余等ノ一行カ該流行病ニ就キ調査ノ爲メ香港ニ派遣ノ命ヲ奉シ東京ヲ發シタルハ實ニ明治廿七年六月五日ニシテ當香港ニ到着シタルハ同月十二日ナリキ抑余等ノ該病ニ就キ調査スヘキ主旨ハ微菌學上病理學上及臨床上ノ事項ニシテ病理及臨床的研究ハ青山教授之ヲ擔當シ微菌學的研究ハ余之ニ當ルノ約ナ

「ペスト」病ノ原因調査第一報告

會誌

北里醫學博士北里柴三郎

五月ノ頃ニ至リ

其餘焔延テ鄰地香港ヲ侵セシヨリ

茲ニ亦毒炎ヲ

逞フシテ今日ニ至ルモ尙ホ未タ勢ノ終熄ヲ見ス

余等ノ一行カ該流行病ニ就キ調査ノ爲メ香港ニ派遣ノ命ヲ奉シ東京ヲ發シタルハ實ニ明治廿七年六月五日ニシテ當香港ニ到着シタルハ同月十二日ナリキ

抑余等ノ該病ニ就キ調査スヘキ主目ハ微菌學上病理學上及臨床上ノ事項ニシテ病理及臨床的研究ハ青山教授之ヲ擔當シ微菌學的研究ハ余之ニ當ルノ約ナ

「ペスト病ノ原因調査第一報告」

醫學博士 北里柴三郎

病ノ原因調査第一報告

明治廿七年七月

七日香港ニ於テ

編者敬白

黒死病原因調査の成績は調査主任北里青山兩博士歸朝後の今日醫師

別なく齊しく聞かむを願ふ處にして殊に會員諸君よりも概々御聞

之候際恰も好し此程北里博士より「ペスト病」の原因調査第一報告と題する冊子二

部を一は本會藏書用として一は會員諸君へ寄贈品として贈與相成りたり然るに

一々御覽に供し候は當に手数と時日を要するのみならず自然其惠に浴するの

一連あるを免れざるを以て今之を本誌後録に轉載し儻く會員諸君の研究に資し

同時に北里博士の厚賜を拜謝す

醫學博士 北里柴三郎

病ノ原因調査第一報告

明治廿七年七月

七日香港ニ於テ

編者敬白

黒死病原因調査の成績は調査主任北里青山兩博士歸朝後の今日醫師

別なく齊しく聞かむを願ふ處にして殊に會員諸君よりも概々御聞

之候際恰も好し此程北里博士より「ペスト病」の原因調査第一報告と題する冊子二

部を一は本會藏書用として一は會員諸君へ寄贈品として贈與相成りたり然るに

一々御覽に供し候は當に手数と時日を要するのみならず自然其惠に浴するの

一連あるを免れざるを以て今之を本誌後録に轉載し儻く會員諸君の研究に資し

同時に北里博士の厚賜を拜謝す

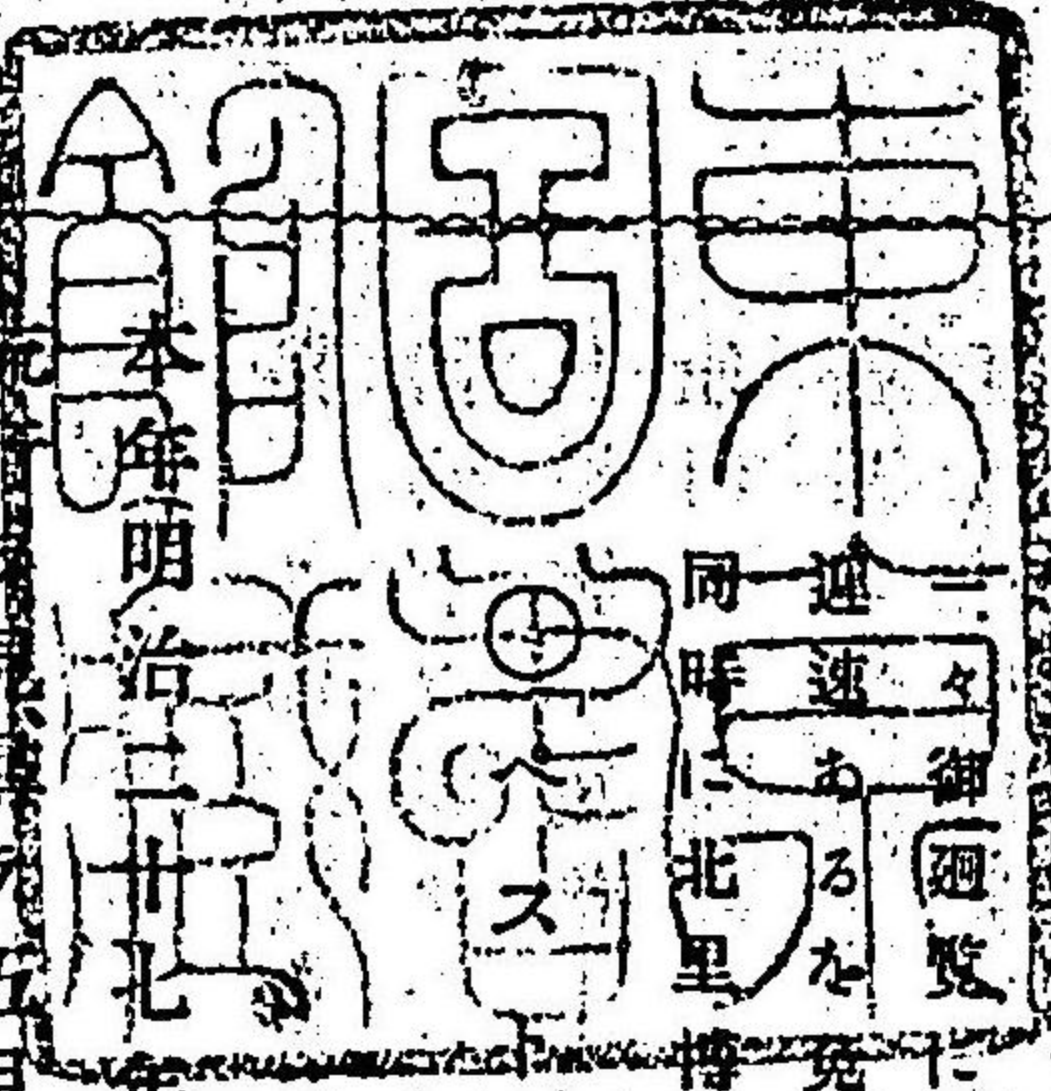
醫學博士 北里柴三郎

病ノ原因調査第一報告

明治廿七年七月

七日香港ニ於テ

編者敬白



リシ、余等一行ノ當香港ニ着スルヤ先ツ在港帝國領事ヲ經テ來意ヲ香港植民地政廳ニ致シ、亞テ植民地醫務長ドクトル、エアルス氏及國家醫院副院長ドクトルロウソン氏ニ面議セリ、同副院長ハ終始好意ヲ表シ可及的便宜ヲ與フヘキ旨ヲ告ケ、今回新ニ設ケタル堅尼街避病院(Kennedy Town Hospital)中ノ一室ヲ以テ余等ノ研究場ニ充ツルコトヲ許シタルニヨリ、六月十四日ヲ以テ始テ其研究場ニ於テ該病ノ研究ニ着手スルヲ得タリ

右研究ニ着手ノ當日、余等ハ「ペスト」患者ノ一屍骸ヲ得テ之ヲ剖檢スルノ幸機ヲ得タリ、即チ青山教授刀ヲ執テ之ヲ行ヒ、余ハ其鼠蹊腺腫、心臟内ノ血液、肺、脾、肝ノ諸臟器ヲ採テ之ヲ檢シタルニ一種ノ細菌夥シク存在スルヲ認メタリ、然レトモ其屍骸ハ死後十一時間ヲ經過シタル者ナリシカ故ニ、果シテ此細菌ハ「ペスト」ト如何ナル關係ヲ有スルモノナルヤハ、之ヲ審判スルニ由ナカリシモ、先ツ之ヲ培養基ニ種植シ、又脾臟ノ一片ヲ採テ試ニ之ヲ南京鼠ニ接種セリ、而シテ此日又重症患者(林温攝氏四十度五分腋窩腺腫ヲ有ス)ノ指頭ヨリ法ニ倣ヒ血液ヲ採取シ之ヲ微菌學的試験ニ供シタリシニ亦前者ト相均シキ細菌ノ鏡下ニ顯然タルヲ見タリ、但此細菌ハ其兩端中部ニ比シテ「アニリン」色素ヲ吸收スルコト強ク且莢囊(Capsule)ヲ有シテ其狀恰モ雞虎列刺菌ニ類似シタルモノナリ

翌十五日余ハ囊ニ諸臟器及患者ノ指頭ヨリ得タル血液ヲ以テ血清培養ヲ試ミ置キタリシモノヲ採リ之ヲ檢視セシニ、亦初メ血液及腺腫中ニ認メタルモノト鏡檢上毫モ其種ヲ異ニセサル細菌ノ發育セルヲ見タリ、然リト雖モ之ヲ前キノ血液中ニ發見シタルモノニ比スレハ其桿稍、少シク長ク、其中部モ亦能ク色素ヲ吸收スルヲ以テ、試ニ此培養セルモノヲ採テ更ニ南京鼠、海豚、家鼠、家兔及鳩ノ皮下ニ接種セリ

余カ研究ニ着手ノ日即チ十四日ニ於テ脾臟ノ小片ト患者ノ指頭ヨリ得タル血液ヲ以テ試験セル二頭ノ南京鼠ハ二日ヲ經テ斃死セリ、之ヲ剖檢スルニ接種部ニ於テ水腫ヲ起シ、同部及臟器中ニハ同一ナル細菌ノ存在スルヲ見タリ、又培養基ヨリ採リテ接種シタル諸動物ハ鳩ヲ除クノ外其軀ノ大小ニ準シ一日乃至四日間ニシテ斃死セリ、而シテ之カ剖檢上及微菌學上ノ所見ハ前記南京鼠ニ於ケル徵候ト敢テ異ナルコトナカリキ、尙ホ動物試験ノ詳細ナルハ後段ニ於テ記載スヘシ

又日々各患者ノ血液ヲ採リテ之ヲ試験セシニ、其血中常ニ上ニ記載セルカ如キ細菌ノ存在スルヲ認メタリト雖モ其數ノ多寡ニ至テハ固ヨリ一定ナラス、時ニ數多ノ標本ヲ檢シテ僅ニ其二三ノミヲ見シカ如キコト往々之アリ、然リト雖モ

解剖セシ屍躰(其數十五以上)ノ腺腫、脾、肝、肺、腦、腸等ノ諸臟器及心臟内ノ血液等ニハ必ス常ニ夥多ニ該菌ノ存在スルヲ見サルコトナク、又之ヲ培養基ニ種植スルニ常ニ同一ナル微菌ノ發育スルヲ見タリ、若シ試ニ腺腫ノ内容物或ハ脾臟ノ一片ヲ覆蓋硝子ニ塗布シ、之ヲ染色シテ顯微鏡下ニ檢視スルトキハ、該菌夥シク存在シテ殆ト純粹培養ノ觀ヲナスヘシ、又脾臟内ニ於テハ所々ニ該菌ノ簇集スルコトアリ、而シテ腺腫及他ノ諸臟器ニ存在スル該菌ハ之ヲ血液中ノモノニ比スルニ菌ノ中部「アニリン」色素ニ染色スルコト強シ、然リト雖モ之ヲ血清ニ培養シテ後檢スルニ腺腫内容物ヨリ採リテ發育セシメタルモノモ、血液ヨリシタルモノモ、其發生ノ狀共ニ異ナルコトナクシテ、全ク同一種ノ微菌タルヤ毫モ疑ヲ容レサル所ナリ

以上ノ如ク腺腫ノ内容物、内臓及指頭ヨリ得タル血液等ヲ取テ培養基ニ種植スル時ハ、必ス常ニ同一ナル微菌ノ純粹培養ヲ得ルヲ以テ之ヲ觀レハ、余ハ該菌ノ「ベスト」ト密着ノ關係ヲ有スルモノタルコトヲ確認シタリ

若シ夫レ解剖的變化ニ至テハ青山教授ノ精密ナル報告アルヘシト雖トモ、今其主要ナルモノヲ舉クレハ腺ノ腫脹ト脾臟ノ肥大トニシテ腺ノ腫脹セル局部ハ水腫ヲ來シ赤黒色ヲ呈シテ内ニ稀薄凝膠狀ノ滲出物ヲ有ス、而シテ余カ試驗ニ

供シタル動物ニアリテモ亦人躰ニ於ケルカ如キ現象ヲ呈シ、殊ニ其接種部ニ於テハ人ノ腺腫部ニ於ケルカ如ク水腫性滲出物ヲ來タセリ

余ハ是ヨリ該菌ニ就キ簡單ナル報告ヲナサントス、抑該菌ハ「ベスト」患者ノ血液、腺腫脾臟其他ノ各内臓中ニ存シ、其形桿狀ニシテ兩端鈍圓ナリ、而シテ通常ノ「ア」ニリン色素ヲ以テ能ク染色シ得ヘク、殊ニ其兩端ハ中部ニ比シテ色素ヲ吸収スルコト強ク(殊ニ血液標本ニ於テ然リ)又周圍ニ莢囊ヲ有ス、此莢囊ハ時トシテ著明ニ又時トシテ明瞭ナラサルコトアリ、而シテ脾臟内ニ存スル該菌ハ「メチレン」青ニ依テ最モ能ク染色セラル、該菌ニハ彼ノグラム氏複染法ヲ用ヒ得ルヤ否ハ後日ヲ俟テ之ヲ報道スヘシ

該菌ハ其運動甚タ遲緩ナリ、而シテ孵卵器内ニ於テハ液躰培養基中ニモ亦發育シテ僅カニ混濁ヲ呈ス

該菌ハ又人躰ノ温度ニ於テ最モ能ク血清中ニ發育シ、二十四時乃至四十八時間ノ後ニハ豐饒ナル發生ヲナシ、其外觀濕潤ニシテ帶黃灰白色ヲ呈ス、而シテ血清ヲ液化セシムルコトナシ

該菌ハ寒天培養基(殊ニ偏里設林ヲ含有スルモノヲ良トス)ニモ亦能ク發育シ、而シテ各個ノ聚落ハ帶白灰色ニシテ直下光線ニ映スルトキハ帶青色ノ光輝ヲ放

ツ之ヲ顯微鏡下ニ檢視スルニ濕潤ニシテ稍圓形ニ其周縁ハ不整ナリ、初メ聚落ノ幼稚ナル間ハ全部恰モ玻璃綿毛ヲ累ネタルカ如キ觀アレトモ、漸次發育シテ日ヲ經ルニ隨ヒ其中央ハ厚層ヲ形成スルニ至ル此寒天培養基ヨリ少許ヲ採リテ覆蓋硝子ニ塗布シ、染色シテ顯微鏡下ニ檢視スルトキハ、數個ノ細菌相連續シテ恰モ圓形菌ノ連鎖シタルカ如シト雖モ、細密ニ之ヲ檢スレハ桿狀菌ノ纖維タルコト疑ナキモノトス
寒天阿膠培養基(510)ニ該菌ヲ培養スルニ其發育寒天培養基ニ於ケルト異ナルナク、又之ニ刺植培養ヲ試ムルニ通常ノ溫度ニ在テハ一二日ノ後刺植ノ方向ニ添ヒ纖細ニシテ塵埃ニ均シキ形狀或ハ點ヲナシテ發育シ、其培養基ノ表面ニハ殆ト之カ發生ヲ見ス、而シテ該菌ハ通常ノ「ゲラチン」ヲ液化セシムルヤ否ニ至テハ香港ノ地暑氣酷烈ニシテ通常ノ「ゲラチン」培養基ノ其用ニ堪ヘサルヲ以テ今茲ニ其如何ヲ驗スル能ハス、尙他日ヲ待テ報道スル所アルヘシ
馬鈴薯ニ種植セルモノハ通常ノ溫度ニ在テハ十日間之ニ注意シタリシモ終ニ其發育ヲ見ス、然レトモ之ヲ孵卵器中ニ置ク時ハ一二日ノ後僅ニ發育シテ灰白色ヲ呈シ且乾燥ノ觀ヲナセリ
以上述ヘシカ如シ該菌ノ發育ニ適スル溫度ハ攝氏三十六乃至三十九度ニシテ

其以下幾許ノ溫度ニ至ル迄其發育ヲ遂ケ得ルヤ否ノ問ニ至テハ目下之ニ答フル能ハサルナリ
該菌ノ芽胞形成ハ今日ニ至ルマテ未タ之ヲ認メス

動物試驗

余カ試ミタル諸動物中該菌ニ對シ感受性ヲ有スルモノハ南京鼠、鼠、海豚及家兔ニシテ、若シ此等ノ諸動物ニ接種スルニ純粹培養若クハ該菌ノ存スル「ペスト」患者ノ血液腺腫ノ内容物、臟器ノ一片、腸内容物等ヲ以テスル時ハ、動物ハ其体ノ大小ニ準シテ一日乃至二日ノ後ニ病狀ヲ呈シ、流淚ヲ來シ、舉動緩漫トナリ、遂ニ食餌ニ欲ナク、只靜カニ籠隅ニ蹲踞シ、躰温ハ昇騰シテ攝氏四十一度五分ニ達シ、二日乃至五日ノ後ニ至リ痙攣ノ狀ヲ呈シテ斃ルヘシ、然レトモ茲ニ一言シ置カサル可カラサルモノアリ、即チ余カ香港ニ於テ得タル諸動物ハ皆矮小ニシテ海豚ノ体重一〇〇〇乃至一五〇〇、家兔ノ体重二〇〇〇乃至二五〇〇等ナリシコト之ナリ、若シ動物ノ之ヨリ大ナルモノヲ得テ試ムルニ於テハ恐ラクハ尙ホ長時間其生ヲ保ツヲ見ルヲ得ンカ
試驗ニ供シタル動物ヲ剖檢スルニ其接種部ハ水腫ヲ呈シ赤色ニシテ稀薄凝膠狀ノ滲出物ヲ有シ、脾臟ハ肥大トナリ、又時ニ腺ノ腫脹ヲ見ルコトアリ、而シテ其

臟器中盡ク該菌ヲ證スルコトヲ得解剖的所見ハ甚ク脾脫疽及惡性水腫ノ症ニ似タリ

鳩ハ該菌ニ對シ不感受性ヲ有スルモノ、如シ

余ハ又一二ノ動物(鼠、海豚)ニ純粹培養及臟器ヲ以テ飼養試驗ヲ施セシニ亦接種試驗ニ於ケルカ如キ症候ヲ呈シテ一二日ノ後斃死シ且ツ其臟器中該菌ノ存在スルヲ認メタリ

次ニ余ハ「ペスト」患者ノ當初感染セル室内ノ塵埃ヲ採リテ屢動物試驗ニ供シタリシニ其中一二ハ破傷風ヲ起シテ斃レ、只僅カニ一回海豚ノ「ペスト」症狀ヲ呈シテ斃レ、其内臟中「ペスト」患者ニ於ケルト同一ノ微菌之ニ存在セルモノヲ見タリ、故ニ此塵埃試驗ニ就キテハ尙ホ遠ク歩ヲ進メテ之ヲ行ハサル可カラズ

香港ニ於テ頃日數多ノ家鼠及鼠ノ偶然斃死スルモノアリ、余ハ此斃鼠ニ就キテ檢索セシニ一鼠ノ内臟中ニ於テ該菌ノ存在セルヲ發見シタリ

該菌ノ理化學的作用ニ對スル抵抗力

乾燥試驗 余ハ夥多ノ細菌ノ簇集セル腺腫ノ内容物ヲ取り、之ヲ數個ノ消毒セル蓋硝子ニ塗抹シ、其一部分ヲ攝氏二十八乃至三十度ノ溫度ヲ有セル室内ニ放置シテ空氣中ニ乾燥シ、他ノ一部分ヲ直接ニ日光ニ曝露シタリ、如斯ニシテ每

時(六日間)之ヲ液鉢培養器中ニ投シ孵卵器内ニ置ケリ、然ルニ室内ニ放置セシ者ノ中一乃至三十六時間ナルモノハ二日ノ後能ク發育セシカ、既ニ四日ニ亘リタルモノハ接種後一週間ヲ經ルモ敢テ發育ノ痕跡ヲ見ス又日光ニ曝露セシモノハ曝スコト少時間(三乃至四時間)ノ後既ニ全ク枯死シタリ

血清ニ培養セルモノヲ取リテ右ト同一ノ方法ニ依リ之ヲ試驗セシニ、其成績殆ト前者ト同様ナリキ

熱汽試驗 液鉢培養ノモノヲ取リテ三十分間水浴中ニ入レ攝氏八十度ニ熱セシニ該菌ノ死滅セルヲ見ル、又蒸汽裝置中ニ於テ攝氏百度ニ之ヲ熱セシニ亦數分時ニシテ全ク其枯死セルヲ認メタリ

化學的試驗 石炭酸 余ハ液鉢培養ヲ作り、二三日間之ヲ孵卵器中ニ置キ、其能ク發育セルヲ待テ其十立方、サンチメートルニ〇、〇五立方、サンチメートル(〇、五プロセント)〇、〇七五立方、サンチメートル(〇、七五プロセント)及〇、一立方、サンチメートル(一プロセント)ノ石炭酸ヲ加ヘ、能ク振盪シ、通常ノ室温ニ放置シ、毎時其數滴ヲ取リテ他ノ新製液鉢培養基内ニ接種シ孵卵器中ニ入レ置キシニ、左ニ記スルカ如キ成績ヲ得タリ

〇、五プロセント及〇、七五プロセントノ石炭酸ヲ加ヘ一時間室温中ニ置キシ培

養基ハ解卵器内ニ於テ二日ノ後ニ發育シ、之ニ反シテ「プロセント」ノ石炭酸ヲ加ヘシモノニシテ一時間ヲ經タルモノハ一週日ノ後ト雖モ既ニ發育スル能ハス、而シテ又「五」プロセントノ石炭酸ヲ混シタルモノモ二時間ヲ超ユレハ一週日ノ後ニ至ルモ亦其發育ヲ見ス、故ニ之ヨリ尙ホ以上ノ「プロセント」ヲ有スル者ニ於テハ之カ發育ヲナサ、ルコト論ヲ俟タス。

石灰乳。以上石炭酸ニ於ケルト全ク同一ノ方法ヲ以テ石灰乳ヲ試ミシニ左ノ如キ成績ヲ得タリ。

○「五」プロセントノ石灰乳ヲ含有セル液體培養ニシテ二時間ヲ經タルモノハ尙ホ僅ニ發生スルトモ、「プロセント」ノモノニ至テハ既ニ其發育ヲ見ス、而シテ○「五」プロセントノ石灰乳ヲ加ヘシモノモ三時間以上ニ亘ル時ハ既ニ發育ノ力ヲ失ヘリ。

以上二者藥品ノ他尙ホ種々ノ藥品作用ヲ試ミサル可カラスト雖モ、時日ニ限アルヲ以テ後日ヲ期シテ之ヲ研究セントス。

余ハ是ヨリ「ペスト」ノ大体ニ就キテ簡單ニ之ヲ陳述センニ、彼ノ十四世紀ニ當テ「ペスト」ノ歐亞ニ大陸ヲ蹂躪シ幾多ノ生靈之レカ犧牲トナリタルハ歷史上世人ノ能ク知ル所ニシテ、爾來所々ニ小流行アリシモ漸ク減少シ、遂ニ人ヲシテ「ペス

ト」ハ忽焉トシテ其跡ヲ世界ニ絶チタルカ如ク想像セシムルニ至レリ、然リト雖モ其實ハ否ラス、今日ニ至ルマテ尙ホ其跡ヲ支那ニ潜メ、殊ニ其南部雲南ニ於テハ年々小流行ヲナシツ、アリシナリ、然ルニ本年ニ至リテ廣東ニ現ハレ進テ香港ヲ襲ヒ、七十五乃至八十「プロセント」ノ力死亡者ヲ出スニ至レリ。

余等ハ恰モ此時機ニ遭遇シ、進歩セル今日ノ學術ヲ藉リ、數百年以來其原因ノ世ニ知ラレサリシ「ペスト」病ニ接シテ之ヲ檢索スルノ好機會ヲ得タリシナリ。

今回ノ流行ニ於ケル「ペスト」ノ主ナル症候ヲ擧ケンニ、先ツ三日乃至五日尙ホ長キコトアリノ潜伏期(或患者ニ於テハ八日間潜伏期ヲ有シタリト)ノ後、高熱及淋巴腺ノ腫脹ヲ來シ、疼痛甚シ(此腺腫ハ或ハ發熱ト同時ニ或ハ發熱ノ前後ニ發スルコトアリ)而シテ此腺腫ハ多クハ大腿内面ノ腺ニ發シ、又鼠蹊腺、腋窩腺、頸腺等ノ諸腺ヲ侵ス、舌ハ灰白色若クハ黑色ニシテ厚キ苔ヲ被フル、其他頭痛、謔語、心臟障害又稀ニハ嘔吐及下痢(嘔吐及下痢ノ症ヲ發スル患者ハ豫後最不良ヲ來タシ、患者通例二三日ニシテ斃ル、然レトモ幸ニシテ此諸症候ニ堪ユル時ハ一週ノ後熱度ハ漸次減退シテ漸ク治癒ニ赴クヘシ、然リト雖モ腺腫ハ通常遂ニ化膿ニ陥リ長時日治癒ニ至ラス。

該病ハ又男女老幼ノ別ナク共ニ之ヲ襲フ。

此患者ノ血液ヲ探リテ檢スル時ハ其血中上文ニ記載セシカ如キ微菌ノ存在セ
ルヲ見ル然レトモ其微菌ノ數ニ至テハ多少アルヲ免カレス余ハ三十名ノ患者
ヲ檢シテ二十五回積極的成績ヲ得タリ而シテ殘餘ノ五名中二名ハ詳診ノ後本
症ニアラサルコトヲ證セラレタリキ又已ニ述フルカ如ク血液中ニ該菌ヲ證ス
ルコトハ時トシテハ甚タ困難ニシテ數多ノ標本中僅カニ數個ノ該菌ヲ認メ得
ルカ如キコトアルヲ以テ血液試驗ニ臨ミ之ヲ顯微鏡下ニ檢査スルト同時ニ又
其培養ヲ試ムルニアラズンハ其有無ヲ確言スル能ハス
之ニ反シテ腺腫中ニハ常ニ夥多ノ該菌ヲ包有シ恰モ純粹培養ヲナセルモノ
如キ觀ヲ呈ス然レトモ生鉢ヨリ腺腫ノ内容物ヲ得ルハ極メテ困難ナリトス
血液檢査ハ「ペスト」ノ診斷ニ供スルニ足ル乎曰然リ十中八九ハ之ヲ能クスルコ
トヲ得ヘシ然リト雖モ此際檢者ハ微菌學的熟練アルモノニ非サレハ之ヲ檢定
スル甚タ難シ
微菌性傳染病ニシテ其ハ微機生鉢ノ人ノ血液中ニ存スルヲ知ラレタルモノ僅
カニ二者アルノミ即チ脾脫疽菌回歸熱螺旋狀菌麻刺里亞患者ノ血液中ニ存ス
ル「プラスモヂウム」ハ茲ニ算セス是ナリ然ルニ今「ペスト」患者ノ血液中新タニ
左ノ性質ヲ有スル細菌ノ存スルヲ見ルヲ得タリ

第一 該菌ハ唯リ「ペスト」患者ノ血液腺腫及其内臟中ニノミ存スルモノトス
第二 他ノ傳染病ニシテ未タ如此細菌ヲ有スルモノアラズ
第三 此細菌ヲ動物ニ接種スルニ亦人鉢ニ於ケルト同一ノ症候ヲ呈ス
以テ理由即チ微菌學上ノ三原則ニ據リ該菌ハ「ペスト」ノ原因ナルコトヲ確證
スルニ足ル故ニ「ペスト」ハ一種ノ微菌性傳染病ナリトノ斷案ヲ下スコトヲ得ヘ
シ

該菌ハ如何ナル行路ヲ取リテ人鉢中ニ侵入スルカニ就テハ余ハ先ツ其行路ニ
三アリト云ハン曰ク呼吸器創傷及消化器是ナリ而シテ呼吸器及創傷ヨリ傳染
シタル例證ハ數之ヲ目撃スル所ニシテ後日尙ホ充分ニ之ヲ報告スヘシ其消化
器ヨリスルモノハ未タ之カ例證ヲ見スト雖モ若シ該菌ノ腸内ニ存在スルヲ見
又餌養試驗ヲ施シテ積極的成績ヲ得タリトセハ消化器モ亦其行路ノ一ナルコ
トヲ思ハサルヘカラス
香港ニ於ケル「ペスト」患者ハ多クハ支那人ナリ若干他國人ヲ除キテ而シテ太平
山ノ於ケル支那人ノ居住家屋太平山(Tai-ping-shan)ハ香港ノ一區ニシテ支那人ノ
ミ之ニ住シ今回「ペスト」ノ流行最モ猖獗ヲ極メタル所ナリハ或ハ十數年ノ久シ
キ室内等ヲ掃除スルコトナキカ如ク塵埃汚物堆積シテ尺餘ニ及フモノアリ實

ニ汚穢不潔ヲ極メテ到底普通人間ノ棲息スベキ所ニアラス、一タヒ足ヲ其室ニ容レシモノ誰カ其「ペスト」ノ巢窟トナルノ不得已ヲ感セサルモノアラシヤ

吾人ハ如何ナル方法ヲ以テ「ペスト」ニ對スヘキカ

豫防法トシテハ普通衛生ノ條規ニ從フコト、良好ナル溝渠純正ナル水道ヲ設ケ家屋及市街ノ清潔法等ヲ行フコト最モ適當ナリ
若シ該病一タヒ起ラハ嚴ニ患者ヲ隔離シ、又人ノ之ニ感染セシ家屋ハ其什器ヲ運ヒ去ルノ前ニ「プロセント」ヲ石灰酸水若クハ石灰水又ハ石灰乳ヲ以テ諸物ヲ充分ニ消毒シ、充分空氣ヲ流通セシメタル後衣服、臥具、臥牀等ヲ蒸氣消毒器中ニ投シ、攝氏百度ノ熱ヲ以テ一時間消毒スルカ、若シ又蒸氣消毒器之ナキトキハ直接ニ日光ニ曝シテ數時間放置セシムヘシ、其既ニ用ニ堪ヘサル什具ハ可成之ヲ燒却スルヲ良トス、以上ノ如キ方法ヲ以テ一回消毒ヲ了シタル後尙ホ石灰乳或ハ石灰酸水ヲ以テ室内ヲ床壁等ヲ洗淨スヘシ
患者ノ排泄物ハ石灰乳ヲ混シテ充分ニ之ヲ消毒シ、屍躰ニハ石灰ヲ加ヘ火葬スルカ、又ハ深キ地下(少ナクモ三メートル)ニ埋葬スヘシ、若シ又家屋内ニ偶然斃レタル鼠アルヲ認ムルトキハ前陣ノ消毒法ニ倣ヒ消毒シタル後之ヲ燒却若クハ埋瘞スヘシ

次ニ余ハ殊ニ一言以テ注意ヲ喚起セントス、即チ恢復期ノ後少ナクモ一ケ月間ハ患者ヲ健康者ト隔離シ置カサルヘカラサルコト之ナリ、如何トナレハ外觀上全ク治癒シタルカ如キ者ニシテ尙ホ其血液、腺腫ノ内容中ニ長時(三週間以上)該菌ノ存在ヲ見ルコトアレバナリ

個人的豫防ハ成ルヘク「ペスト」意者及患者ヲ出セシ家屋ノ近傍ニ接近ス可カラズ、又飲食物ニ注意スルニアリ

「ペスト」モ亦他ノ微菌性傳染諸病ノ如ク人工免疫ヲナシ得ルヤ否ニ就キテハ余ハ茲ニ明言シ難シ、他日充分ニ研究ノ上之ヲ報告スヘシ
以上陳述セル所ノモノハ只其要領ヲ摘載シタルモノニシテ其詳細ナルコトハ他日之カ研究ヲ重テ更ニ報告ヲ爲ス時ニ讓ラントス

「ペスト」病ノ原因調査第一報告



尋師範學科講義錄

入會金三十錢
月費金五拾錢

本講義錄は初刊以來月を閱する僅々に六ヶ月に滿たさるも會員の數今や已に三千有餘名の多きに達し第廿九號も將に本月十五日を以て發行せられんとす尙ほ此際大に會員を募集し益々世の斯學に志すもの望に稱へんと欲す左に本會講師の姓名及受持學科を掲ぐ

- 勅語釋義 元文科大學教授 內藤 耻叟君
 - 修身學 文科大學教授 文學博士 元良勇次郎君
 - 心理學 大學院文學士 松本文三郎君
 - 教育原理 外務省翻譯官文學士 國府寺新作君
 - 學校管理法 全 國府寺新作君
 - 教授法 淨土宗大學林教授 峯 是三郎君
 - 教育史 第一高等中學校教授 和久 正辰君
 - 國語文典 第一高等中學校教授 落合 直文君
 - 國語講讀 第一高等中學校教授 小中村 義象君
 - 文學史 學士會院正員 岡松 豊谷君
 - 論語 文科大學教授 石川 鴻齋君
 - 文章軌範 文科大學教授 竹添進一郎君
 - 孟子 郁文館長文學士 棚橋 一郎君
 - 日本歷史 第一高等中學校教授文學士 長澤 市藏君
 - 世界歷史 學習院教授 橋本 又作君
 - 支那地理 同 助教 加藤 秀一君
 - 萬國地理 同 助教 太田保一郎君
 - 日本地理 同 助教 太田保一郎君
-
- 算術 農科大學講師理學士 大森 俊次君
 - 代數 元高等師範學校教授 同 田中 矢德君
 - 幾何 元德島中學校長理學士 大谷津 直應君
 - 簿記 東京府尋常師範學校教授 獨逸理學博士 飯盛 挺造君
 - 物理學 東京府尋常師範學校講師理學士 大石 保吉君
 - 化學 高等師範學校教授理學博士 齋田 功太郎君
 - 動物學 高等師範學校教授理學士 西 松二郎君
 - 植物學 高等師範學校教授理學士 元高等師範學校教授 三宅 盤鴻君
 - 金石 東京府尋常師範學校 講師 小山 正太郎君
 - 習字 高等師範學校教授 鳥居 忱君
 - 圖畫 東京音樂學校教授 橫井 時敬君
 - 音樂 農科大學講師農學士 農科大學講師農學士 橫井 時敬君
 - 農學 左の二君は本會の爲め特に修身講話を寄せらる

發行所

東京市小石川區關口臺町五十五番地

電話番號第一五二八番

明治講學會

會則は貳錢郵券を要す●別に郵券六錢を送らば講義錄見本(拔萃)を郵券廿錢を送らば講義錄壹冊を呈すへし●此廣告を見て弊會へ通信の諸君は可成此廣告を掲げたる新誌名をも御報を乞ふ

香港ニ於ケルハス卜調査ノ略報

曩に北里博士より黒死病原因調査第一報告書を惠贈せられたるを以て直ちに之を本講義録中に轉載して會員諸君の閱覽に供し併せて博士の厚賜を謝したるが今又青山博士は香港ニ於ケル「ペスト」病調査略報なる一書を惠贈し且つ本會及會員諸君の誠意熱心を感謝せられたり因て本會は亦之を印刷に附して會員諸君に報知し以て諸君机上の雙璧と爲す

明治廿七年十一月

明治講醫會

香港ニ於ケル「ペスト」調査ノ略報

醫學博士 青山胤 通述

千八百九十四年五月「ペスト」香港ニ流行シテ猖獗ヲ極ムトノ報告一度我政府ニ達スルヤ政府ハ直チニ醫學博士北里柴三郎ト予トニ命ズルニ親シク同地ニ赴キテ該病ヲ調査ス可キヲ以テシタリ、是ニ於テカ北里君ハ助手石神亨氏予ハ助手宮本叔及ヒ學生木下正中二氏ヲ伴フテ六月五日横濱ヲ出帆シ同月十二日香港ニ到着セリ、予輩ノ香港ニ到着スルヤ即日中川領事ヲ介トシテ香港政廳醫長イイルス及ヒ避病院管理ラウソン二氏ニ面シ告グルニ來意ヲ以テシ望ムニ調査上厚意ヲ與ヘラレム事ヲ以テシ翌十三日先ツラウソン氏ノ嚮導ニ由リテ諸病院ヲ巡視セリ、而シテ予輩ガ最初ニ赴キタルハ「ハイヂヤ」Hygeaト稱スル海上ニ浮ベル船病院ナリキ、此病院ハ數年前避病院ニ供セムガ爲メニ設ケラレタル者ニシテ船内六個ノ小病室ト一個ノ大病室トヲ別ツ、其小ナル者ハ一室一二人ヲ容ル可ク其大ナル者ハ十五六人ヲ容ル、ニ足ル可シ、其他醫員室アリ、藥局アリ、殆ント完全ナル病院ノ體裁ヲ備フ、本症流行ノ初メニ於テハ專ラ患者ヲ此處ニ送リシガ支那人ノ頑冥ナル種々ノ浮説流言ニ煽動セラレテ此處ニ來ルヲ嫌忌シ紛擾多カリシカバ政廳モ止ムヲ得ズケネヂイタウンナル硝子製造所ノ荒廢用ニ堪エザル者ヲ以テ假ニ避病院トナシ之ヲ支那醫ノ手ニ委シ彼等ヲ彼處ニ移シタリ、故ニ予輩ガ至リシ時ハ僅ニ患家掃除ニ從事シテ本症ニ傳染セル英兵十人ヲ容レシノミナリキ、故ニ予輩ガ次ニ予輩ハ硝子製造所ヲ以テ充テタル避病院ヲ一覽セリ、同院ハ二棟ヨリ成リ各棟長二十間、幅

香港ニ於ケル「ベスト」調査ノ略報

醫學博士 青山胤通述

千八百九十四年五月「ベスト」香港ニ流行シテ猖獗ヲ極ムトノ報告一度我政府ニ達スルヤ政府ハ直
チニ醫學博士北里柴三郎ト予トニ命ズルニ親シク同地ニ赴キテ該病ヲ調査ス可キヲ以テシタリ、
是ニ於テカ北里君ハ助手石神亨氏予ハ助手宮本叔及ヒ學生木下正中二氏ヲ伴フテ六月五日横濱ヲ
出帆シ同月十二日香港ニ到着セリ、
予輩ノ香港ニ到着スルヤ即日中川領事ヲ介トシテ香港政廳醫長イイルス及ヒ避病院管理ラウソン
二氏ニ面シ告グルニ來意ヲ以テシ望ムニ調査上厚意ヲ與ヘラレム事ヲ以テシ翌十三日先ツラウソ
ン氏ノ嚮導ニ由リテ諸病院ヲ巡視セリ、而シテ予輩ガ最初ニ赴キタルハ「ハイヂヤ」Hygeaト稱スル
海上ニ浮ベル船病院ナリキ、此病院ハ數年前避病院ニ供セムガ爲メニ設ケラレタル者ニシテ船内
六個ノ小病室ト一個ノ大病室トヲ別ツ、其小ナル者ハ一室一二人ヲ容ル可ク其大ナル者ハ十五六
人ヲ容ル、ニ足ル可シ、其他醫員室アリ、藥局アリ、殆ント完全ナル病院ノ體裁ヲ備フ、本症流
行ノ初メニ於テハ專ラ患者ヲ此處ニ送リシガ支那人ノ頑冥ナル種々ノ浮説流言ニ煽動セラレテ此
處ニ來ルヲ嫌忌シ紛擾多カリシカバ政廳モ止ムコトヲ得ズケネテイタウンナル硝子製造所ノ荒廢用
ニ堪エザル者ヲ以テ假ニ避病院トナシ之ヲ支那醫ノ手ニ委シ彼等ヲ彼處ニ移シタリ、故ニ予輩ガ
至リシ時ハ僅ニ患家掃除ニ從事シテ本症ニ傳染セル英兵十人ヲ容レシソミナリキ、
次ニ予輩ハ硝子製造所ヲ以テ充テタル避病院ヲ一覽セリ、同院ハ二棟ヨリ成リ各棟長二十間、幅

香港ニ於ケル「ベスト」調査ノ略報

二間三尺餘、室ノ中間、長ク三尺ノ通路ヲ剩シテ兩側ニ筵席ヲ敷キ以テ病床トス、患者ハ蒲團ナク被物ナク直ニ此上ニ臥シテ輾轉呻吟ス、其悲惨ノ狀實ニ見ルニ忍ヒザリキ、同院ヨリ一段高キ處山上更ニ一院アリ、是レ新築セル屠豕場ヲ假用セシ者ニシテ予輩ガ至リシ後數日硝子製造處病院ヲ廢シテ患者ヲ此處ニ移シ東華醫院分局ト稱セリ、

以上二院ノ西一段高キ處警察署ニ假設セル病院アリ、後ニ山ヲ負ヒ前海ニ面シ空氣ノ流通極メテ佳ク又風光ニ富ム、之レ所謂「ケチヂイタウン」、ホスピタルト稱スル者ニシテ英醫ノ手ニ屬シ他ニ比シテ稍ヤ整頓セル者ナリ而シテ支那人其他各國ノ患者ヲ容ル、モ其數甚多カラズ、

此日ラウソン氏ハ最後ノ病院ヲ以テ予輩ノ調査所ニ充テム事ヲ諾シタルヲ以テ翌十四日ヨリ同院ノ廊下ニ「ラボラトリウム」ヲ設ケ以テ研究ニ從事セリ、而シテ予ハ同月二十八日夜俄然「ベスト」ノ襲フ處トナリ人事不省ナリシ事殆ント二週間、爾來漸々快癒ニ赴キ八月二十一日同港ヲ發船シ同月三十一日漸ク歸朝スルヲ得シ次第ナルヲ以テ予ガ充分ニ本症ノ調査ニ從事セシハ僅ニ十五日ノ小日子ニ過ギズ、而シテ此間遭遇セシ困難又極メテ少ナカラザリキ、就中不便ヲ感ゼシハ予ガ支那語ヲ解セザルノ故ヲ以テ支那人ノ患者ニ對シ病歴ヲ問ヒ自覺的症候ヲ叩キ或ハ些末事ニ至ル迄一々通譯者ノ口ヲ藉ルニアラズムバ能ハザリシ事之ナリ、實ニ探檢者ガ精密ナル調査ヲ遂ゲムト欲スル時隔靴搔痒ノ感ニ堪ヘズシテ憾ミ多キハ言語ノ不通ニシテキルヒヨオモ骨ヲ發疹室扶斯探檢ノ際此歎ヲ泄セシヲアリキ、調査日子ノ短キヲ此ノ如ニシテ困難モ亦多カリシガ幸ニ屍ヲ解クヲ十九患者ヲ診セシヲ四十五、其餘支那病院ニ於テ夥多ノ患者ヲ觀察シ殆ント所思ヲ遂ゲコ、ニ諸君ニ其結果ノ概畧ヲ報告スルヲ得ルハ予ノ竊ニ満足スルナリ、

予ハ之ヨリ臨床上所見及ビ解剖的變化ヲ論ゼムトス、而シテ之ヲ論スルノ前香港ノ地理人口住民生活ノ狀態等ニ就テ要ヲ摘ンデ述ベ置カムト欲ス、

香港ノ地理

香港ハ廣東省珠江口ニ横ハレル一小島ニシテ島内平地少ナク殆ント海上ニ屹立セル山嶽ノ觀ヲナス、山勢中央ヨリ東西ニ流レ南面ハ直チニ大洋ニ向ヒ北ハ一葦帶水ヲ隔テ、廣東省ト相對ス、長サ十一英里、幅二乃至五英里、全島殆ント花崗石ヨリ成リ礫ヲニ赭土ヲ以テス、而シテ山上所々石骨ノ露出セル處少カラズ、往時ハ全ク赭禿ナリシモ近時松柏等ヲ移植シ漸々其繁茂ヲ見ルニ至レリ、

氣候

同島ハ北緯二十二度七分東經百十四度十分ニ位セルヲ以テ夏期ハ暑氣酷烈ニシテ七八月ノ頃ニ至リテハ通例九十四五度ニ達シ最モ低キモ八十度ヲ下ルヲナシ、然ノミナラズ此候多ク續キテ三月ヨリ十一月ニ亘リ此間氣候變シ易ク晴雨定マラズ、冬期ハ煦温ニシテ降雪ナク結氷ヲ見ルヲ極メテ稀ナリ、

歴史

香港ノ歴史ハ人ノ善ク知ル所ナレバコ、ニ詳説スルヲ要セズ同島ハ古土豪ノ領スル所ナリシガ清ノ初メ之レヲ討平シ後今ヲ去ル五十二年英國ノ所領ニ歸シ其後廿五年前其對岸ナル九龍半島モ共ニ英國ノ版圖トナレリ、英國ノ香港ヲ得ルヤ山ヲ斫リ海ヲ埋メ市街ヲ建設シ港ヲ築キ以テ今日ノ繁盛ヲ見ルニ至ラシメタリ、此市街ヲ稱シテキクトリヤ市ト云フ、

井クトリヤ市

同市ハ島ノ北面ニアリ、海岸ニ沿フテ長ク山ヲ繞リ人家層々高ク山坡ニ倚ル、今地形及ビ住民ノ状態ニ據リテ假ニ街市ヲ別ツテ東中西ノ三部トナス、而シテ東部ハ巨商、大賈、官衙、兵舎ノ存ズル所中部西部ノ低キ所ハ支那小商人及ビ支那下等移民ノ住スル所ナリ、而シテ彼ノ「ベスト」ノ巢窟ト稱スル最モ汚穢ナル太平山ハ實ニ此中部ニ位ス、

道路ハ花崗石ヲ細碎シテ土上ニ敷キ「セメント」ヲ以テ之ヲ硬固ニシ厚サ六七寸ニ達ス、其幅ハ本道支道ニヨリテ差異アリト雖モ大概狹クシテ間々一間ニ滿タザル者アリ、家屋ハ二層若クハ三層ニシテ煉瓦ヲ以テ建築セラル、

同市ノ面積ハ大凡四百〇一萬七千二百方「メエテル」、戸數七千九百餘、而シテ其人口ニ至テハ支那人ノ課税ヲ恐レテ届出デザル者多キヲ以テ其詳細ヲ知ルニ由ナシト雖モ給水局ノ調査ニ由レバ十六萬三千九百四十九人内支那人十五萬九千九百七十四人ナリト云フ、然レモ之レ恐ラクハ水ヲ要スル者ノミニシテ其他蓬船ニ生活スル者潛匿者等ヲ加フレバナホ多數ニ昇ル可シ、故ニ香港九龍ヲ合サバ人口二十五萬ニ下ラザル可シト云ヒシ者アリ、

支那住民ト地坪ノ關係 即チ支那人ノ數ヲ十五萬九千九百七十四人トシ之ヲ其戸數六千六百ニ比較シ一人ニシテ若干ノ地ヲ占ムルヲ得ルヤヲ計算セシ者アリ、即チ之ヲ左ニ示ス、而シテ表中掲グル所ノ土地ノ廣サハ皆方「メエテル」ヲ示セシ者ナリ、

家屋坪數 (○)	家屋及ビ接近道路坪數 (△)	居住戸數	人口	(○)カーメーナルニ對スル人口割合	(△)カーメーナルニ對スル人口割合
----------	----------------	------	----	-------------------	-------------------

全	市	803440	1171280	6600	151974	5.3	7.7
西	健康地	266200	348480	2700	58792	4.5	5.9
中	健康地	146040	329120	2746	51406	4.8	6.4
東	健康地	183920	232320	977	15206	9.89	15.3
太平山	健康地	2860440	39246	387	14284	2.0	2.7
太平山ノ中一丁四面	健康地	83732	60652	15	647	1.29	1.8

土地ノ面積ニ比シテ戸數ノ多キ事此ノ如ク戸數ニ比シテ人口ノ多キ事此ノ如シ、然カノミナラズ支那人ノ移住ハ近來益其數ヲ加フル者ノ如シ、之ヲ既往ニ徵スルニ實ニ千八百八十一年ヨリ九十二年迄全市住民ノ増加ハ四十一「プロセント」戸數ノ増加ハ十三・九「プロセント」ニシテ家賃ノ昇騰ハ六十九・八「プロセント」ナリト云フ、其人口ノ増加此ノ如ク甚シキニモ拘ラズ家屋ノ新築之ニ比例セズ、加フルニ家賃ノ昇騰此ノ如シ狹隘ノ家屋數多人數ノ群集スル素ヨリ怪ムニ足ラザルナリ、聞ク英政廳ハ從來方五「メエテル」ニ住者一人ノ制ヲ改メテ方七「メエテル」ト爲サムトスト、予ハ此改革ノ速ニ實行セラレンコトヲ望ム者ナリ、

同市住民ノ過半ハ職工、人足等ニシテ此下等ノ業ニ從事スル者ハ殆ント皆支那人ナリ、而シテ支那人男女ノ割合ハ左ノ如シ、

男	女	男	兒	女	兒
六二、四〇%	一九、二三%	八、九二%	九、四五%		

予ハ是ヨリ進ムテ同市住民ノ衣食住ニ就テ少シク述ブル所アラムトス、然レモ各部ニ就テ、一々

之ヲ枚擧スルハ煩ニ堪ヘズシテ且必要ナキヲ以テ「ベスト」ノ尤モ猖獗ヲ極メタル太平山及ビ其附近ニ住スル支那人民ノ状態ニ限リテ左ニ記載ス可シ、之レ多クハ宮本氏ガ見聞セシ所ニ係ル、

太平山

キクトリヤ市ノ中部山脚二個ニ別レテ一ハ東北ニ走リ一ハ南北ニ趣キ此間淺キ谿谷ヲナス、此所ニ介在シテ一區ヲナス者之レ即チ太平山ナリ、人家ハ山勢ニ從テ相重疊シ屋ハ屋ヲ壓シテ遠ク望ムバ恰モ段階ノ如シ、東西ノ道路ハ稍平ナルモ其南北ニ通ゼル者ニ至テハ峻坂ヲナシテ之ヲ攀ヅル人ヲシテ疲勞ヲ感ゼシム、道路ハ極メテ狹隘ニシテ二層三層ノ家屋之ヲ挾ミ其間仰ギテ僅ニ天空ヲ望ム、實ニ炊煙ノ熾ナル時ノ如キハ天日ヲ掩フテ晝ナホ暗キヲ覺ユ、家屋ノ構造ハ一定ナラズト雖モ概テ四十年前ノ建築ニカ、ル鬆粗ナル煉瓦屋ニシテ其長キ一棟ヲ壁(イ)ヲ以テ縱斷シ、又之ヲ橫斷(ロ)シテ數戸ニ分ツ、(第壹圖第二圖)然レ厩前ニ述ブルガ如ク地勢急ニシテ後面直チニ懸崖ニ對スル家屋ハ中央ニ縱斷ノ壁ヲ設ケズ、

一戸ノ最下層(ハ)ハ店ヲ有スル者ノ他ハ前ヲ三分シテ狹キ入口(ニ)壁(ホ)梯子(ヘ)トシ一層二層ハ前面ニ一個或ハ二個ノ狹小ナル窓(ト)ヲ有ス、(第二圖)故ニ日光及ビ空氣ハ此窓ヨリスルノ他通路ヲ有セズ、殊ニ家ノ後面懸崖ヲ控エタルモノ、如キハ前面ニ厨房ヲ有スルヲ以テ日光及ビ空氣ハ僅ニ厨房ヲ經テ通ズルアルノミ、此ノ如クニシテ止マバ尙可ナリ、然ルニ人口増加ノ勢ハ各層ヲ上下ニ別チ(第三圖ト)ナホ松板ヲ以テ之ヲ數室(ロ)ニ區劃セシム、イイルス氏ガ千八百七十四年香港「デリブレ」ニ太平山家屋ノ狀ヲ記セシ者ニ曰ク、
各戸通例一ノ厨房ヲ有ス、而シテ懸崖ヲ背ニスル家ニアリテハ道路ニ向ヘル所ニアリ、故ニ空

氣ハ厨房ヲ經過スルニ非ザレバ入ル事能ハズ、此一戸ノ大サハ平均奥行八・六「メートル」、間口四・六「メートル」、高サ三・三「メートル」トス、此一戸ヲ更ニ別チテ八室トス、此一室ハ平均奥行二・三「メートル」、間口二「メートル」、高サ二・三「メートル」ナリ、此上ニナホ中二階ヲ作ル、此一室ハ一家族ヲ容ル、ナリ、今此一戸中ニ住スル人員ヲ調査スルニ十六人ヨリ二十五人ニ達ス、
ト、以テ其狀ヲ察ス可シ、

以上樓述シ來リシ所ヲ概括スレバ一棟ノ家屋ハ壁ヲ以テ縱斷シ之ヲ表裏二面トナシ之ヲ數戸ニ分チ又一戸ニ中二階ヲ置キテ之ヲ上下ニ分チ尙ホ之ヲ數室ニ區劃ス、而シテ一室一家族即チ一戸數家族ヲ容ル、ナリ、
如此ナルガ故ニ室内ニ日光ノ入ルコト極メテ微ニシテ窓或ハ入口ニ近キ室ニアツテハ自他ヲ辨識ス可シト雖モ之ヲ遠カルニ從ツテ室内暗黒トナリ白晝ナホ燈火ヲ執ルニ非ズムバ室内ニ進ム能ハズ、

予輩ガ同地ノ家屋ヲ檢セシ時ハ住民ヲ退去セシメ家財ヲ運び去リ同區ヲ封鎖セシ後ナルヲ以テ其平時室内ノ光景ニ至テハ之ヲ詳ニスルヲ得ズ、只室ヲ劃セル松板ニ微ヲ生シ室前ノ土間ニ數個ノ便壺ヲ並列セルト路上ニ散亂セル器具ノ塵ヲ蒙ムリ煤ニ汚レタルヲ以テ其不潔ノ狀ヲ察スルニ過ギザリキ、實ニ有志兵卒等ガ掃除ヲ行ヒシ時ノ如キハ塵埃積ンテ三四寸ニ達シ居タリト云ヘリ、今イイルス氏記載中ノ一節ヲ借テ予輩ガ觀察ヲ補ハンニ

壁、天井等ハ石灰ヲ塗レル者稀ニシテ只粗鬆ナル煉瓦ヲ以テセシ儘ナリ、又下層家屋ノ床ハ

「シツクイ」ヲ用井或ハ稀ニ敷石又ハ煉瓦ヲ以テスル者アリ、而シテ一層以上ハ二分五厘餘ノ板ヲ張リテ床トス、然レドモ其接目甚密ナラズ、此等ノ家屋ハ建築後一回モ洗淨セシ事ナシ、管ニ彼等怠惰ニシテ之ヲ爲サハルノミナラズ爲シ能ハザルナリ、強テ洗淨ヲ試ムレバ水床板ノ透キ間ヨリ泄レテ下ノ家ハ洪水ノ難ヲ蒙ムル可ケレバナリ、

又氏ノ厨房ノ有様ヲ記セシヲ見ルニ

厨房ハ通例奥行四「メエテル」間、口ニ「メエテル」、高サニ「メエテル」、床ハ石或ハ瓦ヲ敷ク、然レ共常ニ濕潤シテ極メテ不潔ナリ、然ノミナラズ煙突ヲ有スル者少ナキヲ以テ多クハ四壁煤ニ黔ム、厨房ノ一隅穴アリ、以テ汚水ヲ捨ツル所トス、去レド彼等ハ之ヲ便器ニ代用スルナリ、此穴ニ捨テラル、汚水糞便等ハ屋外ニ通セル下水管ニ排泄ス、若シ此下水管ニ損所アル時ハ洩レテ下層ノ家ヲ汚ス、

廁圍ハ旅店等ヲ除キ通常ノ家屋ニハ特別ノ設ナク便宜ニ由テ別ニ一室ヲ撰ミ此處ニ便器ヲ据テ用ヲ便ズ、而シテ市中二百五十人ノ公許ヲ得タル掃除人アリテ毎朝各戸ヲ巡リテ糞便ヲ一器ニ集メ之ヲ捨ツ、又路傍二三ノ公廁アリテ公衆ノ用ニ供フ、然レモ糞便ヲ洗除スルノ設ケ全カラザルガ故ニ近來其新設ヲ許サズト云ヘリ、而シテ此公廁ニ入ル者ハ幾許カ租稅ヲ要スルヲ以テ下等人民ハ前ニ述ブルガ如ク厨房ノ汚水管ヲ以テ便器ヲ兼ネシメ又婦女兒童ハ其床下ニ供フル便壺ヲ穴ニ洗フ者多シ、今年ノ如ク旱天長クシテ給水不充分ナル時ハ汚物下水管中ニ停滯シテ排泄充分ナラズト云フ、

又支那人ノ不潔ナル二十年前途ハ室内ニ豚ヲ飼養セシガ英政廳ノ禁ズル所トナレリ、イイルス氏

ハ實ニ左ノ如ク記載セリ、

予ハ各家ニ百餘頭ノ豚ヲ飼養セルヲ見タリ、實ニ床下厨房臥床ノ下到ル所飼箱ノ横ハラザルナシ、而シテ其糞便床ヲ浸シ餘リテ中二階ノ薄クシテ接目疎ナル床板ヲ泄シテ階下ノ床ニ點滴ス、

以上ノ他屋下ニ窖「Keller」アリ、(第三、四圖チ)人其内ニ住ス、以上説キ來リシ所以テ此中ノ狀況如何ヲ察スルニ足ル可シ、

衣服ハ普通ノ支那服ニシテ只其模様配置等ニ於テ少シク北方ト差異アルノミ、其材料ハ概チ綿布麻布ヲ用キ裳ハ多ク通例塗ルニ一種ノ油ヲ以テス、夏時ニ於テハ男ハ通例半身裸體ニシテ且ツ男女共ニ履ヲ穿タザル者多シ、イイルス氏ハ實ニ彼等ノ衣服ニ付テ左ノ如ク言ヘリ、

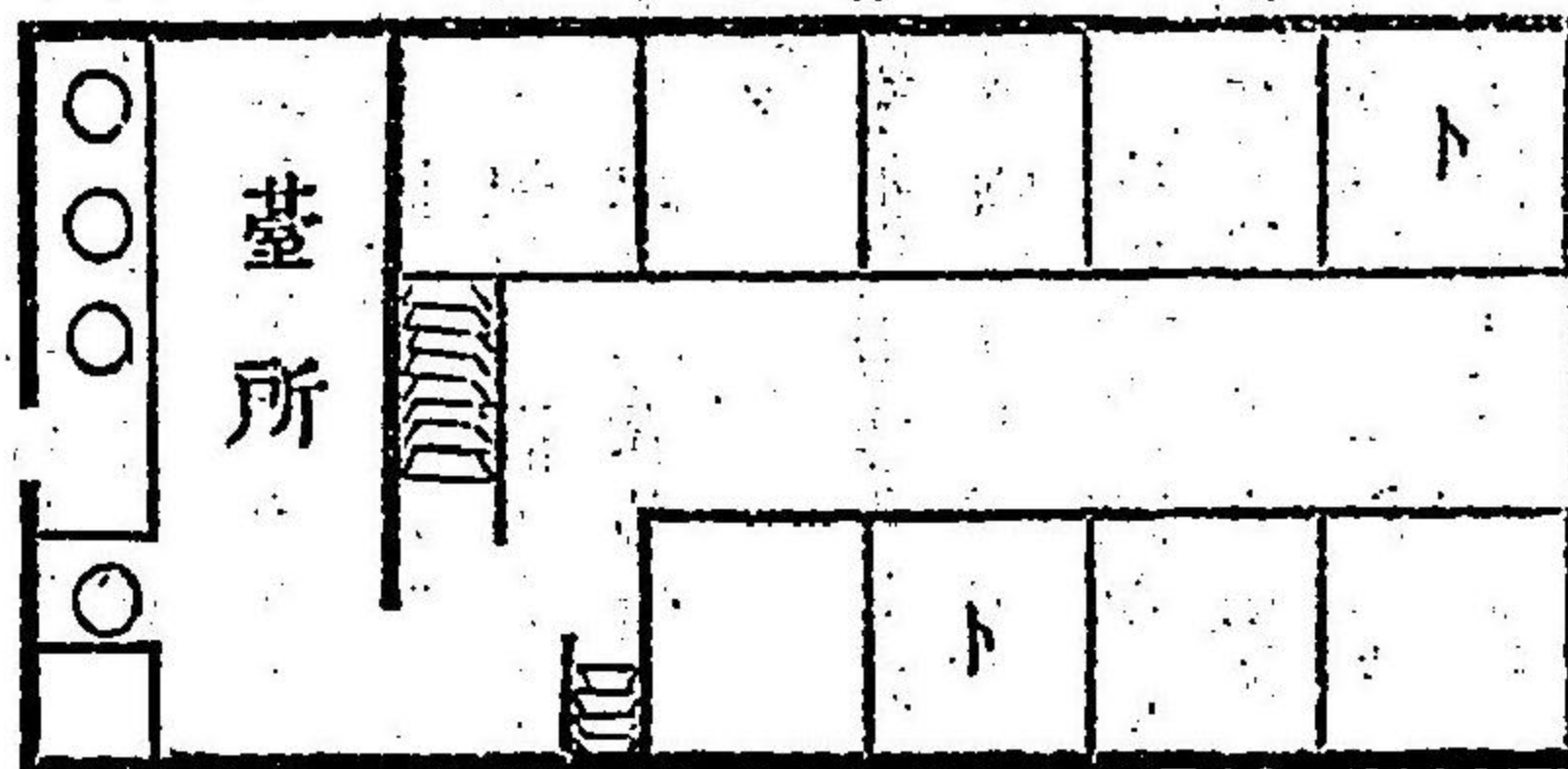
男子ハ時トシテ顔面、手足等露出セル部分ノミ洗フ事アレ共數年間濕布ヲ以テモ其體ヲ拭ヒシ事ナキ者多シ、婦人ハ稀ニ身體ヲ洗フ事アリ、之レ予ガ直接ニ一支那婦人ヨリ聞キシ所ニシテ予モ亦之ヲ疑ハズ、若シ稀ニ身體衣服ヲ洗フ事アレバ皆厨房ニ於テスルナリ、衣服ハ一ケ月或ハ數ケ月ニ一回洗濯スル事アレ共破レテ用ニ堪ヘザル迄洗ハザルヲ常トス、故ニ一衣五六年ノ着用ニ堪ユルナリ、而シテ夜具、衣服等ノ綿ヲ入レシ者ニ至テハ決シテ之ヲ洗フ事ナク(中略)

又虫ノ發生甚シキ時ノ他ハ日光ニ曝ス事ナシ、

彼等下等人民ノ食料ハ主食トシテ米、高粱、粟等ノ粥(寧口雜炊)其他蓮根、白瓜、冬瓜、豆等ノ野菜及ヒ豚、魚類ニシテ菓物ハ荔枝、芭蕉實、龍眼肉、柑等ヲ食ス、而シテ豚ノ如キモ其肉ニ至テハ到底彼等ノ味ヒ得可キ所ニアラズ、常人ノ食フニ堪ヘザル所ヲ購ヒ來テ之ヲ食用ニ供スルノミ、故ニ當

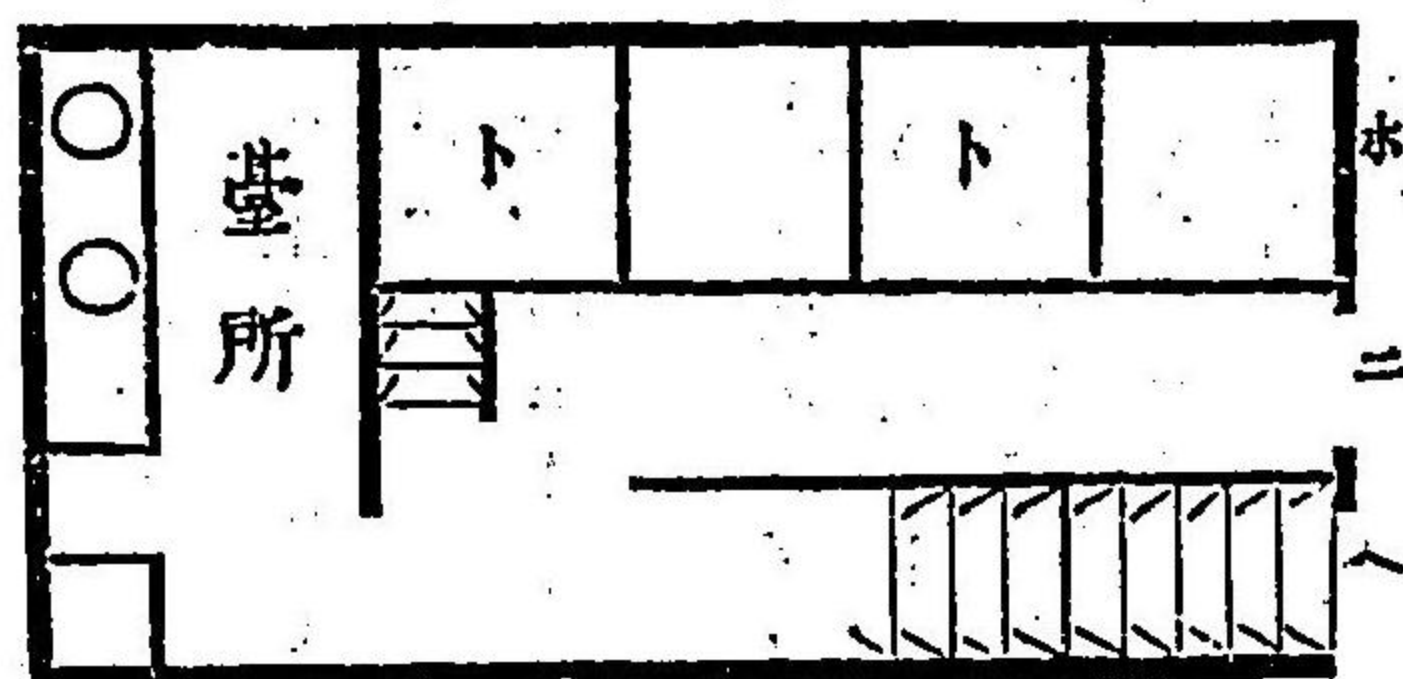
第五圖

(面平層二一)



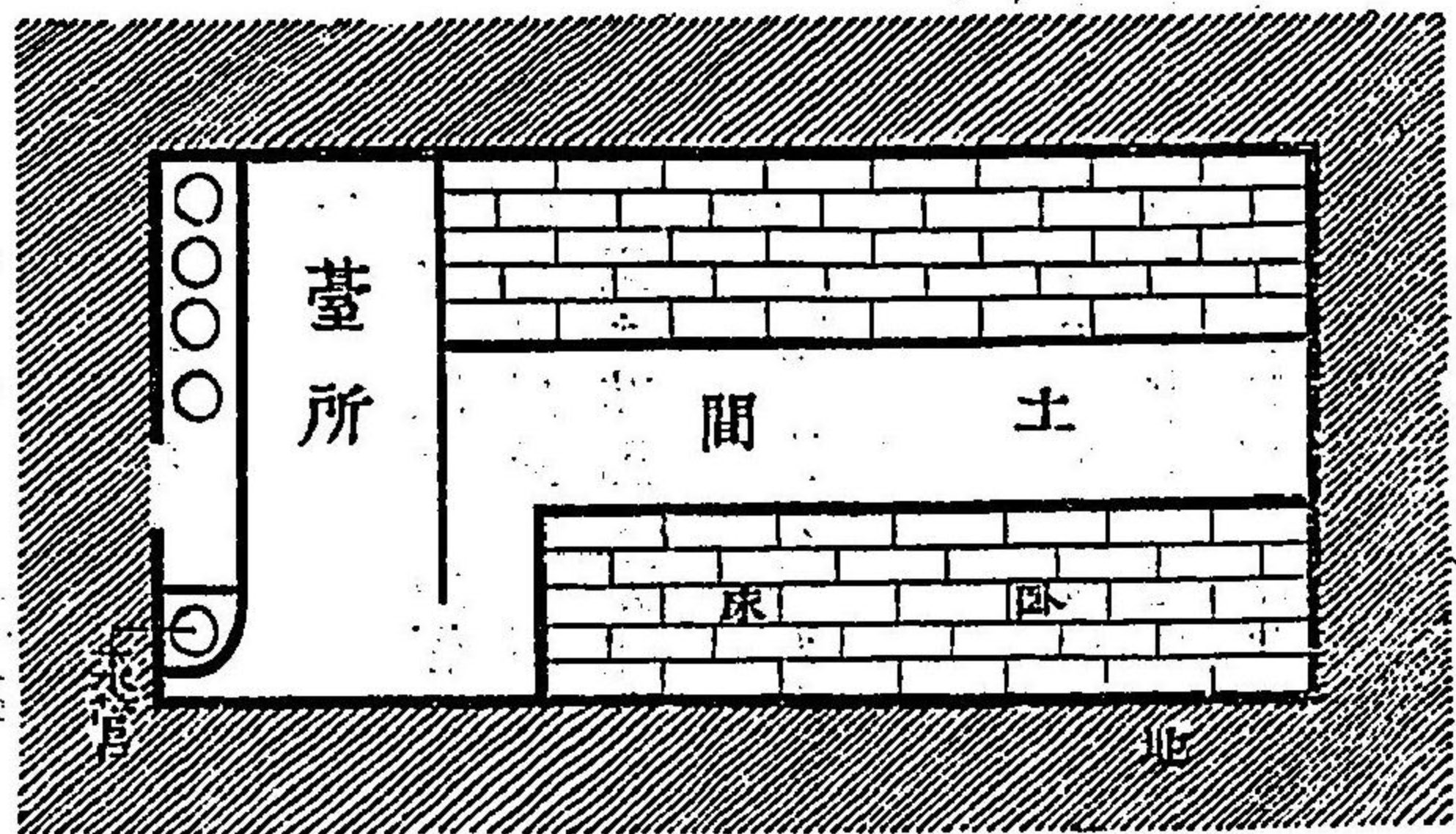
第六圖

(面平層下ルサセ有テ店)

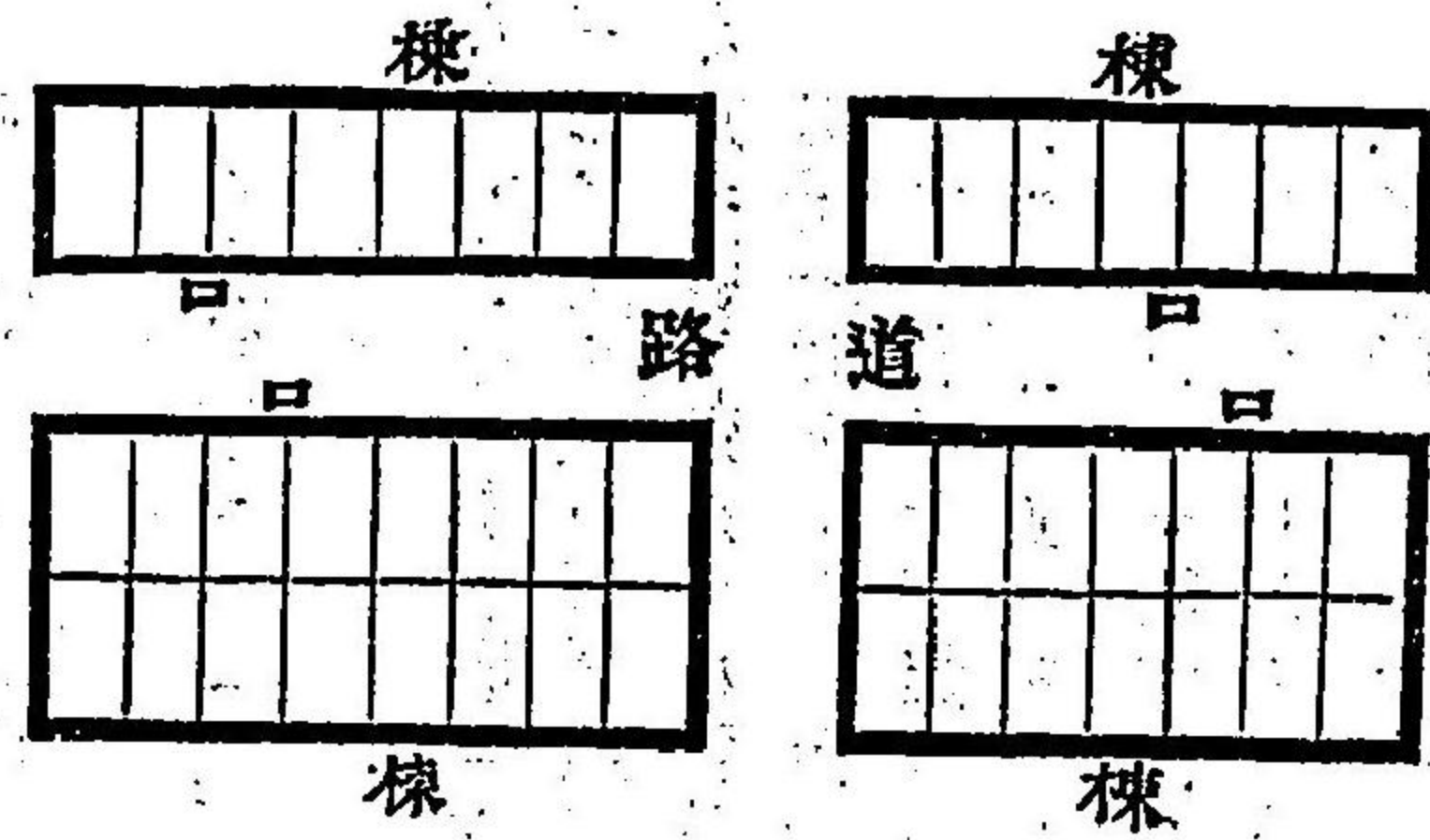


第四圖

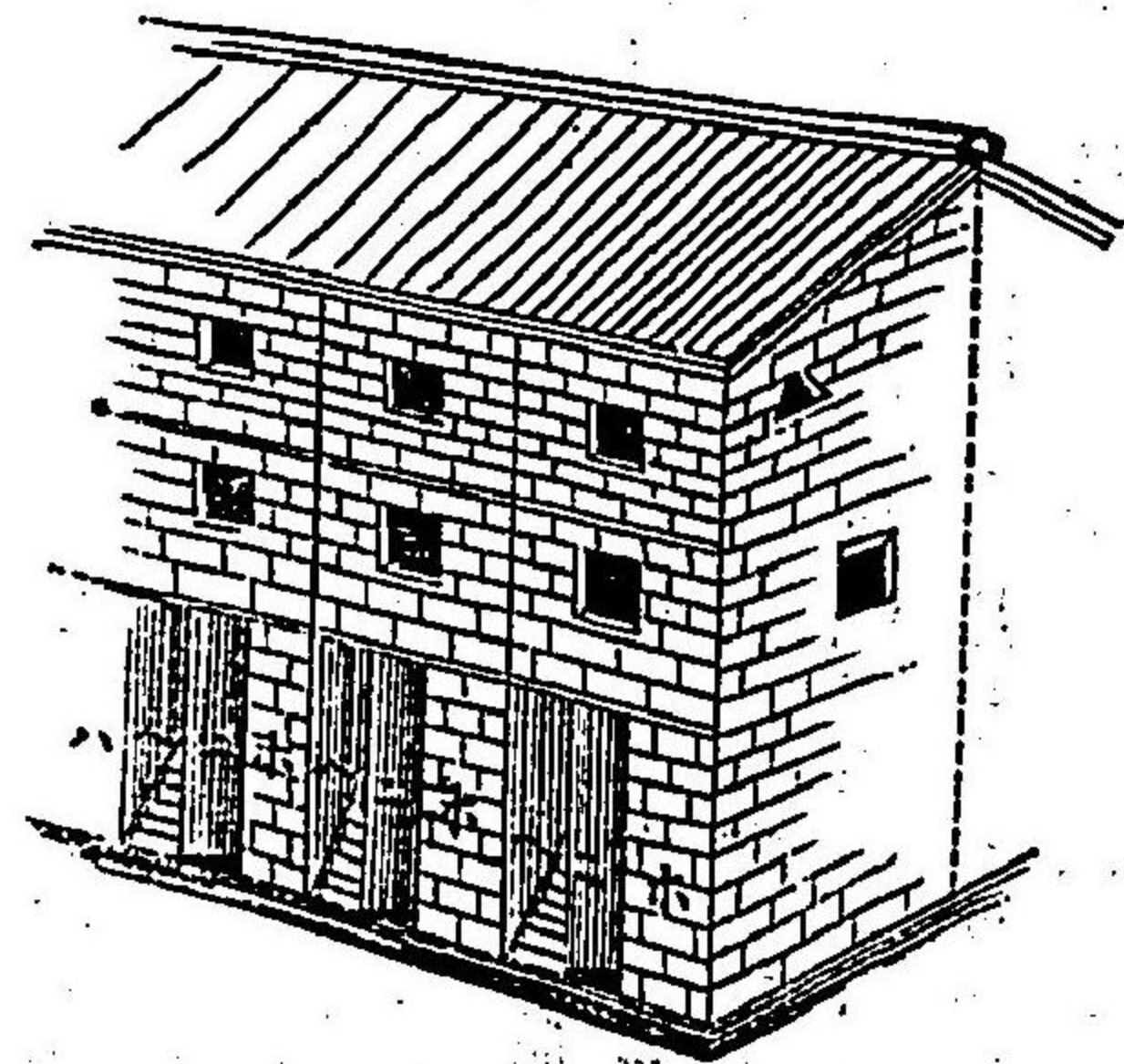
(面平ノ密)



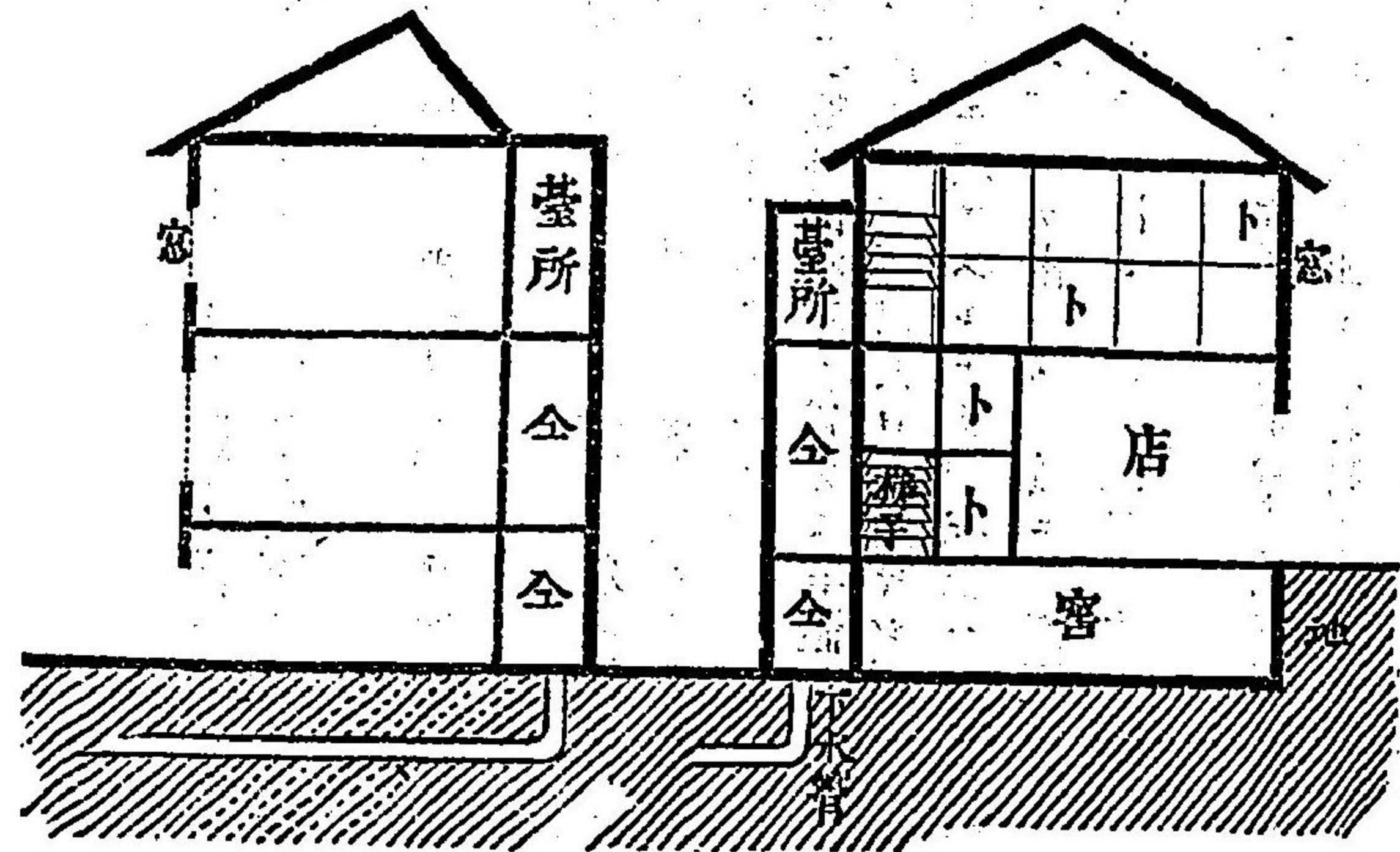
第一圖 (平面)



第二圖



第三圖



地ノ住民ハ廣東人ニシテ軀幹長大ナルニ關セズ下等人民ハ營養惡クシテ身體憔悴、顔色蒼白、一見病者ノ如シ、食物ニ付テ殊ニ予輩ノ注目ス可キハ彼等ノ菓實ノ他一物モ烹炊スルニアラズムハ食ハザルト生水ヲ飲用セザルコト之ナリ、下水溝渠ハ到底完全ナリトハ云ヒ難キモ地勢斜面ナルヲ以テ稍、其用ヲ完フス、飲料水ハ近時完全ナル水道成リテ雨水ヲ山上ノ雨池ニ貯蓄シ引導シテ敷度之ヲ濾過シ鐵管ヲ以テ之ヲ各戸ニ配ツ、而シテ大平山モ亦其徳ニ浴スルコトヲ得ルナリ、然レモ例年十月以降翌年四月頃迄降雨少キヲ以テ毎春多少給水ノ不足ヲ感ズ、殊ニ本年ハ早魃甚シカリシヲ以テ其患モ亦從テ大ナリシト云フ、

香港ハ從來不健康地ニシテ惡性「マラリヤ」ニ罹ル者多カリシガ近時水道、溝渠ノ設ケ成リテヨリ漸々其跡ヲ斷チ又虎列拉ノ如キモ甚シキ流行ヲ見ズト云フ、

香港ニ於ケル「ペスト」流行ノ概況及ビ其起原

香港ニ於テ「ペスト」ノ初メテ萌芽ヲ發セシ時日ニ至テハ諸説區々トシテ明カナラズト雖モラウソング五月十日同地ニ開キタル衛生會議ニ呈出セル意見書ヲ讀ムニ書中「我等ハ東華病院ヲ巡視シテ其一室ニ目下廣東ニ流行セル者ト同症ノ患者凡二十人ヲ見タリ、」云々ノ一節アルヲ見レバ恐ラクハ其初メテ起リシハ四月下旬頃ナル可シ、而シテ六月初旬ヨリ中旬ニ至テ尤モ猖獗ヲ極メ一日六七十人ノ新患者ヲ出スニ至リシモ同月下旬ヨリ漸々減少シテ九月上旬ニハ殆ント全ク其跡ヲ絶ツニ至レリ、

本症ノ同地ニ起リシ原因ヲ尋ネムト欲セバ先ヅ同地ニ特別ノ事情アリシヤ否ヲ考ヘ又自ラ其近隣地ニ往キテ之ヲ探究セザル可カラズ、予ガ探究シテ得タル者ハ旱天ト近隣諸地ニ於ケル本症ノ流行之ナリ、乞フ左ニ此二者ノ概況ヲ述ベテ其由來セル所ヲ見ム、

予ハ曩ニ香港ニ於テハ毎年十月以降翌年三四月頃迄ハ降雨少キ事ヲ述ベタリシガ本年ハ早魃最モ甚シク昨年十一月ヨリ本年五月ニ至ル迄一滴ノ降雨ナク爲メニ大ニ水ノ缺乏ヲ來シ三月中旬ニハ給水ノ時ヲ限リテ一日七時間トシ次ハ四時間トシ四月下旬ニ至テハ遂ニ二時間ノ他全ク水ヲ得ル能ハザルニ至レリ、殊ニ支那人住居ノ邊ハ此困難尤モ甚シク遠ク山上ノ谿谷ヲ探リ僅少ノ水ヲ掬ヒ來リテ用ニ供セシト云フ、此早魃ガ本症ノ誘因ヲナセシヤ否ヤニ至テハ予ノ明言シ能ハザル所ナリト雖モ北海、廣東、海口ノ諸地ニテ既往ニ今年ニ流行セル「ペスト」ハ概ネ旱天ノ後ニ起リシ事ヲ明言セラレタリ、

予ハ之ヨリ進ムデ近隣本症流行地ノ狀況ヲ略叙シ今回香港ニ流行セル「ペスト」ノ何處ヨリ輸來セラレタルカヲ講究セムト欲ス、

雲南省ニ於テハ本症ハ殆ント地方病ノ如ク毎年流行スト云フ、同省蒙自ニハ歐人ノ傳道師ニシテ醫ヲ兼テタルモノアリ、彼等ノ言フ所ニ由レバ本年モ亦流行シツ、アリト云ヘリ、

北海ニ於テハ千八百五十年、千八百七十七年、千八百八十二年、千八百八十四年ノ數回本症ノ流行アリシガ爾來久シク全ク其跡ヲ絶テリ、然ルニ今年三月中旬ニ至テ再ビ其流行ヲ來タセリ、

廣東ニ於テハコレ迄本症ノ流行セシコトアリヤ否ヤ判然タラズ、恐ラクハ本年ヲ以テ始メトスルカ、少クトモ近年ニ於テ其流行ヲ見ザリシ事ハ確ナル者ノ如シ、然ルニ本年三月下旬ヨリ本症流行シ

甚シキ慘劇ヲ演ゼリ、同地ニ於ケル本症流行ノ狀況罹病者及ビ死亡數等ハ素ヨリ判然セズト雖モ香港日本領事館書記生白須氏ガ同地ニ赴キテ親シク聞キ得タル所ヲ傳聞スルニ同地ノ支那人ハ只死者幾十萬ナルヲ知ラスト云ヒ西洋人ハ一般ニ十四萬人餘ナル可シト語レリト云ヘリ、予ハ二者共ニ眞ヲ措ク能ハズト雖モ其影ノ映ズル所如此ク大ナリ、其實體モ亦必ズ大ナラザル可カラズ、

廈門ニ本症ノ流行セシハ疑ナキモ其詳細ヲ知ルニ由ナシ、然レモ其流行ノ香港ヨリ後ナルヲハ確ナル者ノ如シ、

廣西省高州ニハ四年前本症ノ流行セシヲアリシモ本年ノ如何ニ至テハ詳カナラズ、然レモ佛國、支那、印度知事ノ說ニ據レバ本症ノ廣東ニ於テ尤モ猖獗ヲ極メシ頃支那南部ニ於テモ亦一般ニ流行セリト云ヘリ、

以上述べ來リシ諸地中本年「ペスト」ノ流行セシ事確實ナルハ廣東、北海、蒙自、廈門ノ四地ナリトス、而シテ廈門ハ香港ヨリ後ナルヲ以テ言フヲ要セズ、又蒙自ニ至テハ稅關アリテ東京ヲ經テ香港ト貨物ノ往來アレバ決シテ頻繁ナラズ然ルニ廣東、北海ノ二地ハ其流行香港ニ先チ而モ其交通極メテ頻繁ナリ、廣東ト香港トハ其距離海上九十哩ニシテ汽船ヲ以テスレバ僅ニ六時間ヲ以テ達ス可シ、又香港ニ於テハ自家ノ生産物ト稱スル者殆ト之レ無キヲ以テ日常ノ用具ヨリ蔬菜ニ至ル迄盡ク之ヲ廣東ニ仰カザル可ラズ、加フルニ廣東ニハ稅關アレバ香港ニハ之レナキヲ以テ洋商ノ貨物ヲ支那内地ニ輸入セムトスル者ハ商路上間接ニ香港ヨリスルヲ以テ二地ノ交通ハ實ニ繁劇ヲ極ム、而シテ北海、香港間ノ交通ハ之ヲ香港、廣東間ニ比スレバ數等ヲ輸ス可シト雖モ香港在住

支那人食用ノ豚ハ皆北海ヨリ來ル者ナレバ此間ノ往來モ亦頻繁ナリ、如此ナルヲ以テ香港ノ「ペスト」ハ此二地ヨリ輸來セシ事尤モ近シ、而シテ同地ノ衆醫ハ廣東ヨリ來レルヲ信ズ然レモ又北海ヲ否ムノ證ナケレバ予ハ之ニ疑ヲ存ズ、而シテ此二地ニハ何レヨリ來リシカハ又明ナラズ、此ノ如ク本症傳播ノ有様等ヲ考究スルニ當テ尤モ予輩ガ注意ヲ喚起シタル者ハ澳門ガ本症ノ災害ヲ免カレシコト之ナリ實ニ澳門ハ香港ヲ去ルヲ海上四十五哩、廣東ヲ去ルヲ又甚遠カラズ、而シテ間交通ノ盛ナル二地ト北海間トニ超ヘタリ、即チ香港ヨリハ朝夕二回汽船ノ往來アリテ僅ニ二時間廣東ヨリハ河汽船ヲ以テ四時間ニシテ達スルヲ得ン、而シテ同港ハ平坦ノ地多ク地勢南ニ面シ夏日ノ如キモ南風絶ヘズシテ暑氣香港ノ如ク酷烈ナラズ故ニ夏日ハ此所ニ暑ヲ避クル者多シ、其兩地トノ交通此ノ如クナルニ關セズモ本症ノ侵ス所トナラザリシハ必ズヤ因ル所ナクムバアラズ、予ハ其原因ヲ索メテ

(第一) 澳門ハ近來貿易衰退シ從テ支那勞働者ノ移住多カラサルヲ、

(第二) 同地ニ於テハ本症ノ香港ニ流行スルヲ聞クヤ溝渠ヲ疏通シ檢疫法ヲ行フ等豫防法ヲ嚴ニセシヲ、

(第三) 警察行政香港ニ比シテ行届キ居レリトノヲ、

(第四) 南風常ニ動キ市街空氣ノ流通香港ニ比シテ良キヲ、
右ノ數項ニ過ギズ、予ハ同地ニ遊ムデ親ク視察ヲ遂ゲムト欲シテ病ノ爲メニ其意ヲ果サザリシハ遺憾ニ堪ヘザル所ナリ、

予ハ之ヨリナホ一步ヲ進メテ本症ノ原因、症候、病理解剖的變化及ビ治療法ニ論及セムト欲ス、

「ペスト」ノ原因

「ペスト」ノ原因ハ一種ノ有機體ナラムトハ嘗テキルヒヨガ預言セシ所ニシテ千八百七十八年アストラハンニ本症ノ流行セシ時ゾンメルプロオトハ顯微鏡下ニ血中一種ノ光輝アル微小體ヲ見タリト云ヘリ、然レモ當時微菌學ナホ幼稚ニシテ現今ノ如ク發達セザリシヲ以テ其微小體ノ果シテ何物ナルカヲ斷言スルコト能ハザリキ、然ルニ今回我同行ノ北里君ハ腫脹セル腺及ビ血液ニ一種ノ微菌ヲ發見シ之ヲ種々ノ動物ニ試ミテ眞ニ其本症ノ原因タルヲ明ニセリ、君ノ功績ハ實ニ偉大ナリト云フ可シ、而シテ此微菌ガ如何ニシテ人ノ體中ニ侵入スルカノ問題ニ至テハ微菌學ノ範圍ニ屬スレモ強テ之ヲ其檢索ニノミ委ス可キニアラズ之ヲ決スル又臨床的ノ觀察ヲ要スルコト大ナリ、

抑、本症ノ接觸性傳染病ナルヤ否ヤノ問題ハ學者ノ一爭點ナリキ、而シテ予ノ考フル所ニ由レバ本症ハ彼ノ天然痘等ノ如ク少シク患者ニ接シタリトテ容易ニ傳染スル者ニアラズ、實ニ「ペスト」ノ流行時ニ當テ常ニ患者ニ接スル醫師、看護人等ノ本症ニ襲ハレシ事比較的ニ少キハ古來事實ノ證明スル所ニシテ今回ノ流行ニモ予、石神其他一人ノ日本醫師及一名ノ支那醫ヲ除キテハ醫師看護人中傳染セシ者ヲ見ズ、殊ニ予輩三人ハ特別ノ事情アリテ存ジタルナリ、而シテ多數ノ本症患者ヲ容レ而モ空氣ノ流通極メテ惡シキ一室ニ入りテ長ク此處ニ止マル時ハ或ハ空氣ノ微菌ヲ介シテ體中ニ入ルコトナシト云ヒ難カラシ、然レモ今回ノ流行ニ於テ英國兵士ノ患家掃除ニ任セシ者三百人餘ナリシガ其中本症ニ感染セシ者僅ニ十人ノミナリキ、コレ空氣ヨリスルコト少ナキノ一證ナリ、若シ又空氣ヨリスル者ナリトセバ望扶斯微菌ノ飲料水ニ由テ體中ニ入り腸ノ聚腺及ビ孤腺ヲ犯シ

續キテ腸間膜腺ヲ侵スガ如ク先ツ氣管枝腺ガ最モ強ク腫脹ス可キ筈ナルニ予ハ剖見上一回モ其劇シキ癩衝ヲ起セシ者ヲ見ザリキ、然レモ病ニ所謂好襲地 Praedilektionsstelle アルガ故ニ氣管枝腺ハ本症ニ取リテ好襲地ニ非ザルヤモ知ル可カラズ、

「ペスト」微菌ノ飲食物ニヨリテ體内ニ輸ラル、ヤ否ヤハ又確答ヲ與ヘ難シ、北里君ハ「ペスト」微菌ヲ鼠ニ飼食セシニ此鼠ハ遂ニ斃レ其血中ニ「ペスト」微菌ヲ發見セリト云ヘリ、然レモ此動物試驗ヲ以テ直ニ人間ニ應用ス可カラズ、如何トナレバ幾ニ述ベシガ如ク支那人ハ一度烹炊シタル者ニアラザレバ食ハザルノ習慣アレバナリ、然ノミナラズ若シ飲食物介ヲナストセムカ腸ノ聚腺孤腺及ビ腸間膜腺ハ裂シク腫脹ス可キ筈ナルニ余ハ一回モ此諸腺ニ劇甚ナル癩衝ト強キ腫脹トヲ見ザリキ、然レモ該諸腺モ亦好襲地ニ非ザルヤモ知ル可カラズ、

グリエジゲル曰ク、本症ニ於テ腺ノ先ツ腫脹スル者ハ其表在スル者ナリ、故ニ鼠蹊腺若クハ腋窩腺ハ最モ初メニ尤モ強ク腫脹ス、又未ダ歩行シ得ザル小兒ニ在テハ頤下腺ノ腫脹スル者尤モ多シ、之レ幼兒ハ物ヲ舐ルコト多キガ故ナラムト、之レヲ要スルニ氏ハ本症毒素ノ體中ニ入ルハ主トシテ皮膚ヨリスルコトヲ認メタルナリ、實ニ予ガ今回調査セル所ニテモ鼠蹊腺ノ腫脹シタル者尤モ多ク腋窩腺之ニ亞ギ他ノ頸腺、顎下腺、肘腺等ノ劇シク侵サレタルハ甚ダ少シ、之レ予ガ幾ニ述ベシガ如ク支那下等人民ハ跣足ニシテ常ニ勞働ニ從事スルコト多キヲ以テ手足ニ創傷ヲ蒙リヤスク微菌之ヨリ侵入スルコト多キニ由ル者ナラムカ、而シテ予ハ患者ノ手足ヲ檢シテ僅微ナル皮膚ノ剝離ヲ有スル者多キヲ見シガ肉眼的ニ創傷ノ存在ヲ證シ得シ者ハ少カリキ、然レモ此微有機體ハ如何ナル小隙ヨリモ侵入シ得可キナリ、而シテ予ハ淋巴管炎ヲ生ジタルヲ見タルコト甚少シ、以上論ジ

來シリ如クナルヲ以テ予ハ「バスト」微菌ハ多ク其進路ヲ皮膚ニ取ルコト恰モ丹毒ノ傷創ヨリ侵入スルガ如クナラムト考フルナリ、予ガ此考ヲ確メムニハ予等ノ病歴ヲ引證スルコト尤モ適當ナルヲ信ズ、予ハ廿六日午後一屍ヲ解キシ時恰モ我助手ハ尿其他ノ檢査ニ繁忙ナリシヲ以テ石神軍醫ニ解剖ノ補助ヲ乞ヒタリ、此日偶香港ノ醫師中原某氏解剖ヲ傍觀セン爲メニ來リテ解屍シテ得タル臟器ヲ他ノ器中ニ移スノ勞ヲ取レリ、而シテ此三人ハ一日若クハ二日ノ後、腋窩腺ニ腫脹ヲ發シタリ、是レ解屍及ビ臟器ヲ取扱ヘル際手ニ吾人自己ノ知ラザリシ微傷或ハ皮膚ノ剝離アリテ微菌コ、ヨリ侵入セル者ナル可シ、然ルニ彼ノ患家掃除ニ從事セシ英國ノ兵士ハ皆靴ヲ穿テ居リシモ其本症ニ感染セシ者ハ概ネ鼠蹊腺ニ腫脹ヲ來シタリ、是レ甚ダ微菌ノ皮膚ヨリ侵入スルト云フ考ニ反スルガ如クナレド此ノ如キ劇シキ勞働ノ際ニハ器物等ノ爲メニ其足脚ニ皮膚ノ小剝離ヲ生ズルコト容易ナルガ故ニ絶對的ニ予輩ガ説ヲ反證スル者ニ非ズ、然ノミナラズ予ハ實際罹病兵士中ニ足ニ瘍アル者又瘡アル者ヲ見タリキ、

今回本症ニ罹リシハ男子多クシテ女子少シ、是襲ニ述ベシガ如ク香港ノ支那人ハ男子ノ數女子ヨリ遙ニ多キガ故ニシテ本症ガ男女ヲ擇ムテ侵スガ故ニアラザル可シ、年齡ニ付テ云ヘバ中年ノ者ニ多クシテ老者及ビ幼者ニ少シ、又乳兒ノ病ニ罹レル者ハ一回モ見タルコトナシ、之レ香港、支那人ニハ中年ノ勞働者多ク幼老者ノ少ナキニ由ルナラムカ、ラウソンハ予輩ガ着港前乳兒ノ患者五六人ヲ見タリト云ヘリ、患者ヲ人種ヲ以テ別チタル者ニハラウソンノ統計アリ、左ニ掲グ、

人種	罹病數	死亡數
英國人	一一	一一
歐亞雜種人	一一	一一
日本	一一	一一
印度人	一五	一〇
葡萄牙及比馬尼拉人	二〇	一一
支那人	未詳	未詳

臨床的症候

潜伏期 病ノ潜伏期ヲ確定スルハ極メテ難シ、實ニ屢見ル所ノ他ノ傳染諸病スラ麻疹ヲ除クノ他ハ其確定セル者ナシ、殊ニ今回ノ如キ場合ニハ之ヲ定ムルコト更ニ難シ、然レ予ハ出來得ル才充分ニ檢査セリ、今得タル所ノ數例ヲ左ニ掲ゲテ以テ參考ニ供セン、

(第一) 予ハ英國兵士ニ就テ病屋掃除ニ從事シテヨリ何日目ニシテ本症ニ襲ハレタルヤヲ叩キシニ、一名ハ四日目ニ、二名ハ五日目ニ、一名ハ六日目ニ、一名ハ七日目ニ、一名ハ十日目ニ、一名ハ二十日目ニシテ發病セリト云ヘリ、然レ掃除ニ從事シテ後果シテ何日目ニ病毒ノ侵入ヲ受ケシハ到底予輩ノ知り得キ處ニ非ズ、

(第二) アロレウナル印度人ハ六月十日掃除掛長トナリテ職務ニ從事シ十三日午後ニ至テ腺ノ

腫脹ヲ發シタリ

(第三) 春野イノナル日本婦人ハ一日「ベスト」患者ノ家ヲ訪ヒ大凡一時間コ、ニ止リテ歸宅シタルニ四五日ヲ經テ本症ニ罹レリ、

(第四) 英國士官ノ僕某ハ一日其主ノ嘗テ掃除掛タリシキ着用セシ衣服ヲ刷拂セシマアリシガ其後一週日ヲ經テ病ニ罹レリ、

(第五) 前ニ述ベシガ如ク予輩ハ廿六日午後解屍ヲ行ヒ而シテ中原ハ廿七日午後ニ右指頭端ヨリ淋巴管炎ヲ發シ予ハ廿八日午後三時突然運動ノ際、左腋窩ニ微痛ヲ感シ且腺ノ少シク腫脹セルヲ注意シ午後十一時半ニ至テ体温三十九度五分ニ昇騰セリ、又石神ハ廿八日午後十二時衣ヲ脱スルノ際突然左腋窩ニ強痛ヲ覺ヘ翌日二時ニ至リテ体温三十七度五分ニ昇リ夜十二時頃ニハ四十度五分ニ達セリ、

以上予ガ實查シ得タル成績ナリ、而シテ予ハ殊更ニコ、ニ潜伏期ノ幾日ナルヤヲ斷言スルヲ得ズ、前驅期ハ之ヲ有セル者少シ、稀ニ其存在ヲ證シ得シ者ハ頭痛、眩暈、食欲缺損、全身違和、嘔吐、悪心、倦怠等ヲ有ス、其持續ハ短キハ一二時間長キハ二三日ニ亘ル、

發病期ノ状態ハ種々ニシテ或ハ惡寒、戰慄ヲ以テ或ハ單ニ惡寒ヲ以テ或ハ全身灼熱ノ感ヲ以テ來リ一定ナラズト雖モ一回ノ惡寒戰慄ヲ以テ發スル者多シ、腺ノ腫脹及ビ疼痛ハ發熱ノ前或ハ其後ニ起リテ又一様ナラズ、成書ノ多數ハ本症ニ前驅期發熱期及腺腫脹期ヲ分テリ、然レモ予ガ今回ノ流行ニ於テ見タル所ニ由レバ決シテ如此キ整然タル時期ヲ分ツ能ハザルナリ、發病期症候ノ同ジカラザル此ノ如シ、故ニ予ハ左ニ二三ノ病歴中ヨリ發病期ノ有様ヲ摘録シ以テ諸者ノ參考ニ供

セム、

第一 支那人、ウ、ヤアト、四十一歳、

六月二十日朝、九龍造船所ニ於テ就業ノ際偶々身體ニ違和ヲ覺ヘ爲メニ歸宅セシガ午後六時ニ至テ惡寒戰慄シ、續テ發熱シ、後頭痛、腰痛、嘔吐、下痢ヲ發シ翌二十一日入院セリ、之ヲ診スルニ左股腺ハ己ニ腫脹シテ胡桃大トナレリ、然レモ疼痛ハ有セザリキ、(下略)

第二 支那人、バンワン、

六月二十六日午後八時頃、身體違和及ビ頭痛ヲ感シ其夜睡眠安カラザリシガ翌日午前二時半頃惡寒、戰慄ヲ來シ次テ發熱シ午前四時半頃右側股腺ニ疼痛ヲ感シ且同時ニ其腫大セルヲ注意セリ、後ニ頭痛増劇シ且眩暈ヲ起シ二回ノ嘔吐下痢ヲ來セリ、

第三 日本人、虎島セン、二十六年、

六月十七日午後一時頃突然頭痛、全身灼熱ヲ感シ次テ惡寒、戰慄ヲ來シ暫時ニシテ甚シク發汗シ後身體ノ倦怠ト煩渴トヲ覺ヘ食欲缺損、且便秘ス、然レモ骨ヲ嘔吐、悪心ナシ、而シテ同月十九日夜十二時頃ヨリ左腋下ニ運動ノ際疼痛ヲ感ズルニ至レリ、

第四 支那人、シエング、ヒイ、四十才、

三四日前ノ午前右頸部ニ疼痛ヲ感シ午後六時惡寒、戰慄ヲ以テ發熱セリ、

第四 日本人、阿邊百太郎、

六月九日朝右腋窩ニ疼痛ヲ發シ正午頃熱感アリ、日晡ニ至テ數回惡寒セリ、以上記セル處ノ病歴ハ據テ以テ發病期ノ状態ヲ推考スルヲ得可シ、ナホ之レヲ再言スレバ熱ハ多

クハ一回ノ惡寒戰慄ヲ以テ初マリ暫時ニシテ三十九度若クハ四十度以上ニ達ス、或ハ又一回若クハ數回ノ惡寒ヲ以テ起リ暫クシテ體温三十九度以上ニ達スル者アリ、而シテ同時ニ來ル所ノ症候ハ頭痛、眩暈、煩渴、身體違和、倦怠及ビ時トシテ嘔吐、惡心、腰痛等ニシテ稀ニ胃部ノ疼痛或苦悶等ヲ來ス、又重症ノ者ニアツテハ胸内苦悶ヲ訴フルコトアリ、其初期ニ於テ二三回ノ下痢ヲ來タス者多シ、

患者ノ顔面ハ紅ヲ潮シ間、「チフス」狀ノ容貌ヲ呈スル者アリ、眼球結膜多クハ充血シ眼球光澤ヲ帶ビ舌ハ乾燥シテ白黃色ノ苔ヲ被ムリ咽頭充血シテ黯赤色ヲ呈シ間、扁桃腺ノ腫脹ヲ認ム皮膚枯燥ニシテ、灼熱シ呼吸數増加ス、脈ハ大ニシテ緊張、中等、概テ重複脈ヲ呈シ其數ハ概テ百乃至百二十ノ間ニアリ、腦症候ハ一様ナラズシテ重症ノ患者ニシテ死ニ至ル迄モ腦症候ヲ呈セザル者アリ、或ハ又發熱後直ニ腦症候ヲ發シテ譫語シ若クハ噪暴スル者アリ、然レモ通例精神朦朧トシテ嗜眠狀ヲ呈シ夜間ニ至テ譫語スル者多シ、

腺ノ腫脹及ビ疼痛ハ前已ニ述ブルガ如ク發熱前ニ、或ハ熱ト同時ニ、或ハ發熱後暫時ニシテ來リ又ハ一二日ヲ經テ起ル者アリテ一定ナラズ、而シテ疼痛ノ有無モ亦一定ナラズ、然レモ其存在シテ劇甚ナル者ニ至テハ爲ニ呻吟ヲ發シ其鼠蹊部ニ存ズル者ニ在テハ脚ヲ伸バズ能ハズシテ屈位ヲ取ル者多シ其腫脹ノ狀態ニ至テモ區々ニシテ一様ナラズ、或ハ漸次腫脹シテ鴉卵大ニ達スル者アリ、或ハ腺自己ノ腫脹ハ僅少ニシテ却テ其周圍ノ組織ニ強キ焮衝、浮腫ヲ生ジ擴延性ニ腫大スルコトアリ、而シテ其初ニ當テハ腺ト皮膚トハ互ニ移動セシム可キモ腺周圍組織ノ焮衝漸ク増劇スルニ從ヒ互ニ癒着シテ移動セシムル能ハズ、而シテ腫脹セル腺上ノ皮膚ハ多クハ潮紅シ且浮腫ヲ呈

ス、予ハ其尤モ劇シクシテ浮腫潮紅ノ上腿ヨリ臀部ニ及ボセル者ヲ見タルコトアリキ、本症ニアリテハ殆ト全身ノ腺多少ノ腫脹ヲ呈スレモ通例表在セル一所ノ腺尤モ主トシテ劇シク侵サル、者ナリ、予ハ此ノ如キ者ヲ名ケテ局所的腫脹ト云ハム、而シテ此局所的腫脹ハ通例身體一側ノ一部ニ限レル者ニシテ例之ハ左側ノ股腺腫脹スルモ右側ニハ敢テ異狀ヲ呈セザルガ如シ、間ニ二ヶ所ニ發スルコトアレモ左右同腺共ニ侵サル、ニアラズシテ一側異腺、假令バ左股腺ト左腋窩腺ト同時ニ腫脹スル者ニシテ兩側同位ナルハ極メテ稀ナリ、而シテ此局處的腫脹ハ股腺ニ來ルコト尤モ多ク腋窩腺之ニ亞ギ頸腺次ニ位シ肘、膝窩窩及ビ項、顎下腺ノ腫脹スルハ稀ナリ、管ニ此ノ如クナルノミナラズ一部腺ノ腫脹ヲ起シタルトスルモ此所ニ屬スル數個ノ腺ハ皆盡ク一様ニ腫脹スル者ニ非ズ、其中二三個ハ甚シク腫脹スルモ他ハ腫脹僅微ナルカ或ハ全ク異狀ヲ呈セザルガ如シ、例之ハ鼠蹊腺ニ於テハババルト氏韌帶ヨリ下方ニ存ズル股腺ハ殆ト常ニ腫脹シテ非常ニ大トナリ又該韌帶深部ノ腺モ腫脹シテ其上方二三仙迷ニ達スルコトアレモ軟下疳ニ伴ヘル横痃ノ如ク其表面ノ腺ヲ侵スコト稀ナルガ如シ、此事ニ付テハ病理解剖ノ章下ニ於テ詳説ス可シ、脾臟ハ殆ト盡ク肥大シ發病後一二日ニ能ク之ヲ觸診スルヲ得ベシ、而シテ肋骨線下二三仙迷ニ達スル者少カラズ、肝臟モ亦肥大シテ發病後一二日ニシテ觸ル、ヲ常トス、心臟ハ發病後暫時ニシテ擴張ス、殊ニ右室ニ於テ著シ、又心尖ニ笛吹様ノ雜音ヲ聽取スルコトアリ、

氣管枝加答兒ハ時々併發ス、尿ハ通例酸性ヲ呈シ茶褐色若クハ赤茶褐色ヲ帶ビ其量減少シ比重增加ス、然レモ其減少ノ定度ニ至テハ病院ノ組織充分ナラザルヲ以テ之ヲ詳査スル能ハザリキ、之ニ化學的檢査ヲ行フニ蛋白ヲ

含有スル者多ク又常ニ著シキ「インヂカン」ノ反應ヲ呈ス然レモ「ヂアツカ」反應ヲ呈セシハ僅ニ一回ノミナリキ、之レ腸窒扶ストノ鑑別上要用ノ點ナラム、尿中又稀ニ血液ヲ混ズルコトアリ、以上述べ來リシ所ハ發病後一二日間ノ状態ナリ、之ヨリ後ニ至レバ頭痛ハ輕減スルカ或ハ一二日ニシテ全ク消退シ身軀ノ違和、倦怠、口渴愈増加シ食欲全ク缺亡ス、惡心、嘔吐ハ初期ニ多シ、而シテ長ク病ノ全經過中持續スルコトアレモ是レ尿毒性ニ因スルモノナラムカ、而シテ吐物ハ通例無色ノ水様液若クハ黄色ヲ帶ビ苦味ヲ有スル者ニシテ又稀ニ咖啡殘渣様ナルコトアリ、舌ハ初メ乾燥シテ帶黄灰白色ナルモ時日ヲ經過スルニ從テ窒扶斯ニ於ケルガ如ク乾燥甚シキヲ加ヘ茶褐黑色ヲ呈ス、又病ノ初期ニハ舌縁赤色ヲ呈スルコトアリ、之ヲ以テ本症ニ固有ナリト云フ者アレモ大ニ誤レリ、

重症患者ニアツテハ通例發病後倏チニシテ筋肉非常ニ瘦削スル者ナリ、腺ノ腫脹ハ前ニ述べタルガ如ク漸次増劇シ終ニ化膿スルカ或化膿セズシテ暫ク同處ニ硬固ノ浸潤ヲ殘シ後漸次縮小シ遂ニ消滅スル者ナリ、殊ニ後者ハ輕症ナル者ニ多シ、而シテ其化膿スル者ハ多クハ發病後十日前後ニ於テシ患者ノ死スル者ハ平均發病後四日ナルヲ以テ古來人ノ專ラ唱導スル「腺ノ化膿スルハ預後ノ善良ナルヲ徵ス、」トノ說ハ甚ダ誤レル者ニシテ寧ロ死期ヲ經過シテ化膿ノ期ニ達スルヲ得シナリ、

熱ハ巖キニ述ベシガ如ク急ニ上昇シテ三十九度乃至四十度以上ニ達シ（或ハ四十一度五分ニ昇ルコトアリ）後長ク稽留スルモノアリ或ハ不正ノ弛張ヲナス者アリ或ハ楷梯狀ニ漸次下降スル者アリテ定型ヲ有セズ、其稽留スル者ハ通例高熱ニシテ概ネ二乃至七日間持續シ或ハ分利様ニ急ニ或ハ

漸次下降ス、死期ニ於テハ熱ハ通例上昇スルガ好シ、

以上説キ來リシ所ハ本症々候及ビ經過ノ大體ニシテ素ヨリ病ノ輕重ニ從ツテ一様ナラズ、故ニ予ハ讀者ヲシテ經過ヲ知り易カラシメンガ爲メ左ニ二三ノ病歴ヲ記載ス可シ、

第一例 印度人、ガヌマル、二十歳、

（既往症） 六月二十二日左者左頸部上腫脹、疼痛ヲ發シ同時ニ頭痛、身體違和ヲ覺ヘ且一回嘔吐セリ、後暫クシテ熱感、煩渴ヲ來シ食思全ク缺乏ス、依テ「ベスト」ト診斷セラレ同日午後本院ニ送ラレタリ、

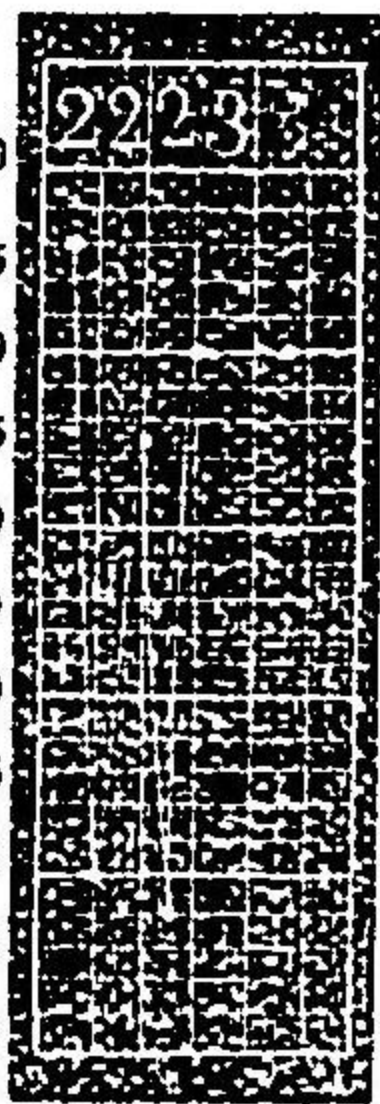
（現症） 二十三日患者ヲ診スルニ患者坐位ヲ取り顔面潮紅、容貌少シク苦悶ノ狀ヲ呈ス、舌ヲ檢セント欲スルニ頸部ノ疼痛劇甚ナルカ爲充分ニ其口ヲ開放スル能ハズ、漸クニシテ舌ノ被苔セルヲ認ム、體格中等、皮下脂肪組織、筋肉共ニ善ク發育シ皮膚ハ乾燥シ之レニ觸ル、ニ灼熱ヲ覺ユ、然レモ他ニ發疹及ビ浮腫ヲ認メズ、脈ヲ檢スルニ脈波中等大、緊張中等、而シテ呼吸頻數、體温四十度六分ニ達ス、心臟及肺臟共ニ異常ナク脾及ビ肝臟ハ患者坐位ヲ取レルガ爲充分ニ檢スルコト能ハズ、頸部ヲ見ルニ左側腫脹シ之ヲ壓スレバ劇痛ヲ訴フ、而シテ頤下腺ハ胡桃大ニ腫脹セリ、

（經過） 二十四日、左頸部ハ腫脹益増加シ然ノミナラズ右側ニモ亦腫脹ヲ來タセリ、之ヲ觸診セムト欲スルニ患者疼痛ニ堪ヘザルヲ以テ果サズ、同部左右共皮膚ノ浮腫セルヲ知ル、以上ノ他昨日ト大差ナキモ呼吸頻數、精神不穩ハ益強キヲ加ヘ患者苦悶ニ堪ヘズシテ時ニ床ヲ降ラントス、予ガ診ヲ終ヘテ去ルノ後幾モナク患者遂ニ床ヲ下リテ踰行ク一二三步、卒然昏倒シテ

死セリ、精神ハ死ニ至ル迄明瞭ナリキ、其死後直ニ之ヲ檢スルニ口角紅色ノ泡沫ヲ出シ全身甚シク藍色ヲ呈ス、又同時ニ直腸ニ於テ體温ヲ檢セシニ四十一度ナリキ、後暫時ニシテ四肢ニ強直ヲ起シタリ、

第二例 日本人、荒川某、三十一年、

(既往症) 六月十四日午後十一時頃突然頭痛、眩暈、身體違和、倦怠ヲ來タシ且同時ニ全身灼熱ヲ感ジ翌十五日午前五時ニ至テ左鼠蹊腺腫脹シ、且指壓ノ際疼痛アルヲ發見セリ、而



ノ午前九時體温ヲ檢セシニ三十九度六分ナリキト云フ、

(現症) 體格中等、皮下脂肪組織發育尋常、筋肉發育中等、皮膚ハ枯燥シテ之ニ觸ル、ニ灼熱ヲ感ス、然レモ他ニ發疹、浮腫ヲ見ルナシ、顔面潮紅、眼結膜充血シ、眼球潤澤、舌ハ甚シク乾燥シ且灰茶褐色ノ苔ヲ被リ咽頭ハ充血シテ黯赤色ヲ呈ス、脈ヲ檢スルニ脈波大、緊張良、且ツ著明ノ重複脈ヲ呈シ脈搏九十二ヲ算ス、心臟ヲ檢スルニ左界ハ乳線ニ達シ右界ハ左胸骨線ニアリ、而シテ心音異常ヲ認メズ、肺ハ打聽診共ニ變化ナシ、鼠蹊部ヲ檢スルニ左股腺二三腫脹シテ蠶豆大トナリ之ヲ壓スルニ疼痛ヲ訴フ、然レモ其皮膚ノ浮腫變色スルヲ見ズ、又腫脹ハ皮膚ト相移動ス、右股腺モ僅ニ腫脹シテ觸ル、コヲ得、然レモ疼痛ナシ、脾臟肝臟ハ肥大セズ、(經過) 十六日、患者煩渴、全身倦怠、不眠、左鼠蹊部ノ劇痛及ビ昨日一回下痢アリシヲ訴フ、患者ヲ檢スルニ舌ハ茶褐色ノ厚キ苔ヲ被ムリ脈搏百二十六脈波大ニシテ實、脾臟肝臟共ニ肥大セズ、心臟ハ境界昨日ニ異ナラザルモ心尖部ニ貧血性ノ雜音ヲ呈ス、左股腺ノ腫脹ハ増大

シテ硬固ナル一塊ヲナシ各腫腺ハ塊中ニ包容セラレシガ如ク今ヤ個々之ヲ觸ル可カラズ、加フルニフバルト氏靱帶ノ深部ノ腺ハ腫脹シテ靱帶ノ上方ニ圓形ノ硬結ヲ觸ル、之ヲ壓スレバ疼痛ヲ訴フ、

尿ハ茶褐色ヲ帶ビ「インデカン」反應ヲ呈ス、然レモ蛋白ヲ含マズ、

血液ヲ取テ顯微鏡下ニ檢スルニ白血球増加ス、殊ニ多核中性着色性ノ者多ク其他「エオジン」着色性細胞一ニヲ認ム、又フライシエル氏血液計ヲ以テ血色素ノ量ヲ檢スルニ其百位ニ相當セリ、體温四十度一分、

十四日、全身ノ倦怠益甚シク食欲缺亡、煩渴並ビ存ス、患者左足ヲ屈縮ス、試ミニ之ヲ展伸セシムルニ同側鼠蹊部ノ疼痛ニ堪ヘズシテ直ニ故位ニ復ス、而シテ左股部ノ腫脹ハ益増加シ皮膚赤色ヲ呈シ來レリ、而シテフバルト氏靱帶深部ノ腺腫脹モ又増大セリ、此他舌苔ハ變ジテ煤色トナリ心臟ノ右界ハ右胸骨線ニ達セリ、眼結膜、咽頭ノ充血元ノ如シ、脈ハ百二十二搏ニシテ大ナリ、

尿ハ茶褐色ニシテ酸性ノ反應ヲ呈ス、而シテ「ジアツ」反應ナシ、之ヲ顯微鏡下ニ檢スルニ硝子樣圓柱ト少許ノ赤血球トヲ認ム、體温四十度一分、

十八日、本日二回ノ下痢アリ、食思ハ少シク復セシモ取食ノ後嘔吐ヲ催ス、脈ハ百十搏大ニシテ充實シ、舌、咽頭、眼結膜ハ依然タリ、左股部ヲ檢スルニ腫脹愈増加ス、此日初メテ脾臟ヲ觸知ス、

尿ハ茶褐色ニシテ酸性ノ反應ヲ呈シ且少量ノ蛋白ヲ含ム、

十九日、患者甚シク倦怠ヲ覺ヘ且嗜眠狀ヲ呈ス、左股部ノ腫脹ハ昨日ニ異ナラズ、然レモ疼痛ハ益甚シ、心音清トナリ眼結膜及ビ咽頭ノ充血少シク減退ス、脈百二十搏、脈波中等大、體温三十八度八分、

二十日、患者嗜眠狀ニシテ然レモ時々興奮ノ狀ヲ見ル、而シテ容貌「チフス」患者ニ似、舌ハ乾燥シテ煤色ヲ帶ブ、脈搏百二十、腫瘍ハ今尙ホ昨日ノ如シ、體温三十九度一分、

二十一日、患者昨夜安眠スルヲ得ズ、且ツ二回ノ下痢アリ、然レドモ今ハ大ニ輕快ヲ覺ユト云フ、是レヲ檢スルニ舌乾燥シ帶黄茶褐色ノ苔ヲ被ムリ結膜ナホ充血シ脾臟ノ肥大マタ依然タリ左股部ノ腫脹愈増大シ且上腿ノ上方前内部ニ浮腫ヲ起シ疼痛甚シ、加之「バルト」氏韌帶深部ノ腺腫モ亦増大シ韌帶上大凡三仙迷ニ達ス、脈搏百二十、脈大、緊張尋常、體温三十九度、二十二日、患者昨夜甚シキ發汗アリシト左眼ノ深部ニ疼痛ヲ感スル「ト」ヲ訴フ、之ヲ檢スルニ應答錯迷狀ヲ呈シ氣應力大ニ減少セルガ如シ、而シテ又此身體ノ著シク瘦削セルヲ覺ユ、全身ノ皮膚ニ紅色ノ小發疹ヲ認メシガ暫時ニシテ消褪セリ、脾臟ハ已ニ縮少セリ、然レモナホ觸ル可シ、心臟ノ濁音界ハ前ニ記セル處ニ異ナラズ、此日左側ノ頸腺二三豆大ニ腫脹セルヲ發見ス、之レヲ壓スルニ疼痛ヲ感ズ、體温三十八度二分、此夜一回ノ下痢アリ、

二十三日、患者身神共ニ爽快ヲ覺ヘ又嗜眠及ヒ錯迷ノ痕ナク呼吸靜穩トナリ食思モ亦少シク奮フ、然レモ舌ハナホ帶黄茶褐色ノ苔ヲ被ムリ左眼結膜非常ニ充血シ且深部ニ疼痛ヲ覺ユ、而シテ右眼結膜及ビ咽頭ノ充血ハ大ニ減退セリ、肝臟ハ肥大シテ觸知ス可ク脾臟モナホ觸ル、一ヲ得、左股部ノ腫脹ハ硬固ニシテ少シク縮少セルガ如シ、然レモ皮膚ナホ浮腫ヲ存ズ、左側頸腺

ノ腫脹ハ昨日ニ異ナラズ、其他胸腹部ニ數多ノ汗疹ヲ認ム、脈搏九十、脈波大ニシテ實ス、體温三十八度、

尿ハ茶褐黄色ニシテ酸性ノ反應ヲ呈ス、著シキ「インデカン」ノ反應アリ、蛋白ノ痕ナシ、

二十四日、身神大ニ爽快ヲ覺ヘ食欲益振ヒ左股部ノ疼痛少シク減ジ項腺マタ縮小セリ、然レモ舌ハ乾燥シテ帶黄茶褐色ノ苔ヲ被ムリ脾臟肝臟ナホ觸ル可シ、脈搏九十、脈波大ニシテ緊張ス、體温三十八度、昨日來便秘ス、

二十五日、身神爽快、食思佳良、便秘ス、昨夜發汗甚シク汗疹殆ント全身ニ普シ、又顔面及手掌無數ノ蚊刺アリ、此部ハ赤色ヲ呈シ少シク凸起シ間々出血ヒシ處アリ、身體ノ瘦削ハ追日甚シキヲ加フルガ如シ、舌ハナホ苔ヲ被ムルモ少シク滋潤セリ、左眼結膜非常ニ充血シ前房ノ外部ニ灰白黄色ノ膿ヲ見ル、角膜溷濁シ瞳孔縮少シ光線ニ反應セズ、脾肝二臟ナホ觸ル可シ、左項腺ノ腫脹ハ大ニ減少セシモナホ觸ル可ク壓スルニ少シク疼痛アリ、左股腫脹部ニ血漿ヲ含ナル水泡ヲ生ズ、之ヲ切開スルニ少許ノ血膿ヲ得タリ、脈搏八十、脈波大ニシテ實、此日體温初メテ平ニ復セリ、

二十六日、左股部ノ創口ヨリ稀薄ナル血膿ヲ泄シ疼痛大ニ減ゼリ、而シテ「バルト」氏韌帶深部ノ腫脹ハ増劇セリ、舌滋潤、脾肝二臟ハ已ニ觸ル可カラズ、食欲佳良、脈搏八十、昨夜旃那ヲ服シテ一回ノ下痢アリ、顯微鏡下血液ヲ檢スルニ多核中性着色細胞ノ増加セルヲ見ル、

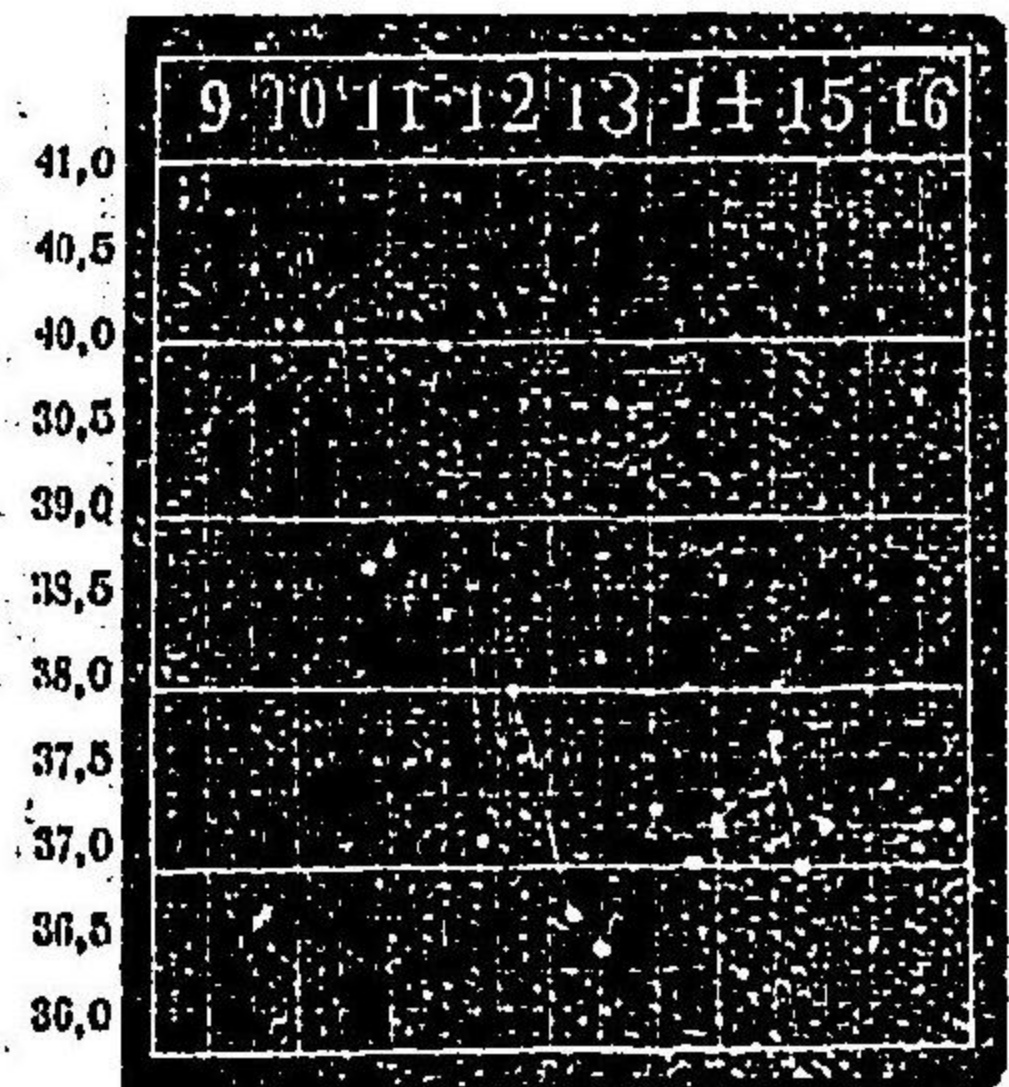
二十七日、今朝便通一回、神身共ニ爽快、食思佳良、左眼ノ狀昨日ニ異ナラズ、心臟左右ニ擴張ス、然レモ雜音ヲ聞カス、脾肝臟ヲ觸レス、創口血膿ヲ泄シ腫脹減小シ疼痛モ亦益輕快セ



レ即チ化膿熱ナリ、而シテ予ガ香港ヲ去ルノ前患者ヲ診セシニ身體肥滿シ創口又殆ド癒ヘタリ、
 第三例 日本人、阿部百太郎、二十歳、

リ、脈搏七十五、
 血球ヲ算セシニ左ノ成績ヲ
 得タリ、
 赤血球 = 6,780,000
 白血球 = 20,000
 二十八日、服藥ニヨリ昨夜
 三回ノ下痢アリ、今朝全身
 ノ倦怠ヲ感ズ、食思佳良、
 脈搏八十、創口稀薄ノ血膿
 ヲ泄ス、
 予ハ病ノ爲ニ續キテ此患者ノ
 経過ヲ見ルヲ得ザリシガ聞ク
 所ニ由レバ二十九日左股部ノ
 他處ニ化膿セシガ爲メ再び切
 開ヲ施セシニ七月二三日ヨリ
 熱度再ビ昇騰セリト云フ、之

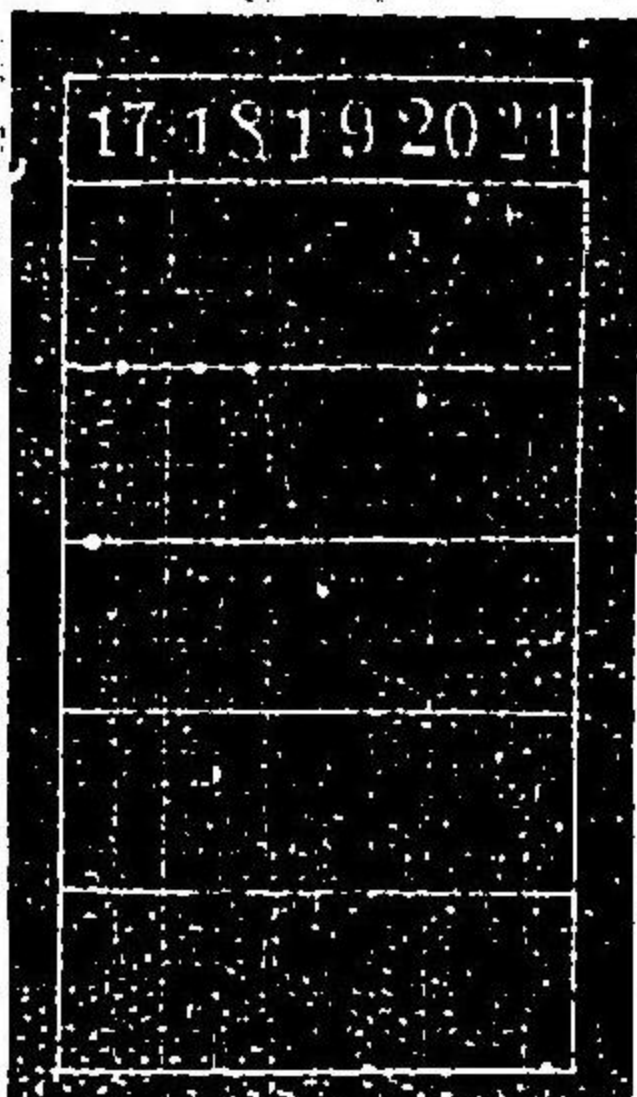
(既往症) 六月九日、突然右腋下ニ疼痛ヲ覺ヘ正午頃ニ至テ發熱シ日晡寒熱往來セリ、翌十日
 食欲缺損、且二回ノ下痢アリ、十一日夜半ニ至テ非常ニ發汗シ四十度ニテ稽留セシ熱ハ倏チ下
 降シ翌十二日ニハ三十七度一分トナリ身神大ニ爽快ヲ覺ヘ苦悶一掃セルガ如ク食欲モ亦大ニ振
 フ、



(現症) 十七日、舌乾燥シ白色ノ苔ヲ被ル、右腋窩腺ハ硬固
 ニシテ胡桃大ヲ有シ之ヲ壓スルニ疼痛アリ、肺ハ氣管枝加答兒
 ノ症候ヲ呈シ脾臟肥大セズ、心臟異常ナシ、爾來右腋窩腺ノ
 腫脹ハ化膿セズシテ漸次縮小シ予カ八月十九日患者ヲ診セシ
 トキハ已ニ小ナル硬結ヲ殘セシノミ、
 以上ハ皆喉腺ノ著明ナル者ナレモ間々臨床上之ヲ證ス可カ
 ラザル者アリ、即チ左ニ其二三ノ例ヲ示サム、

第四例 日本人、河野マス、五十八歳、
 (既往症) 六月十六日午後一時卒然惡寒、戰慄ヲ來タシ次テ
 發熱四十度五分ニ達シ同時ニ強劇ナル頭痛、眩暈、身體違和、倦怠ヲ感シ暫クシテ嘔吐、食欲
 消失、便秘ヲ起セリ、爾來熱感依然トシテ持續シ十七日朝體温三十九度、午前十一時四十度、十
 八日朝夕共ニ四十度、十九日正午三十八度七分、二十日午前九時三十九度八分、日晡四十度九
 分ニ達セリ、而シテ此間精神常ニ明瞭ナリシト云フ、又嘔吐ハ該症候中尤モ劇シカリシト云ヘ
 リ、如此ニシテ二十日「ベスト」ノ疑ヲ以テ午後十時入院シ翌二十一日朝八時死亡ス、

以上ハ香港在住ノ醫師中原某ガ語リシ所ニシテ病ノ經過中絶テ腺ノ腫脹疼痛ヲ見ザリキト云フ、同日予ハ其屍體ヲ剖見セシニ脾臟肥大シ、腸間膜腺二三ハ腫脹シテ小豆大トナリ且割斷面薄赤色ヲ呈ス、鼠蹊腺腫脹セズ、然レモ右側ノ腺ハ少シク赤色ヲ呈ス、腋窩腺頸腺共ニ腫脹セズ、左右顎下腺共ニ腫脹シ左側ハ赤色ヲ右側ハ黒赤色ヲ呈シ其一ニハ榛實大ニシテ且軟ナリ、左鎖骨下腺及ヒ氣管枝腺モ亦腫脹シ共ニ薄赤色ヲ有ス、右扁桃腺腫脹シ軟ニシテ又赤色ヲ呈ス、腸ヲ檢スルニ聚腺孤腺少シク腫脹セリ、(他ハ畧ス)



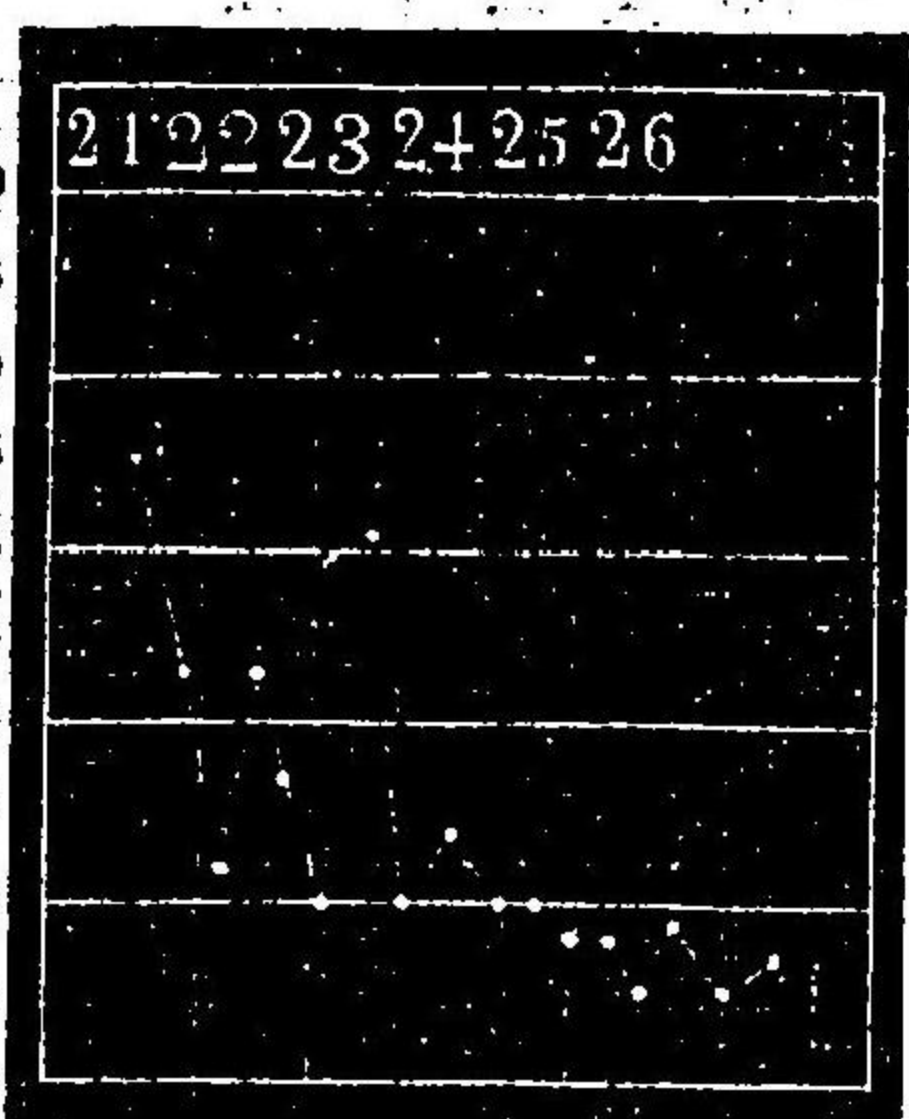
即チ此患者ハ臨床上腺ノ腫脹ヲ發見スル能ハズ、又自カラ疼痛ヲ訴ヘズ、而シテ其屍ヲ解キテ始メテ顎下腺(殊ニ右ニ強シ)ノ腺腫ヲ發見セラレタル者ナリ、

第五例 支那婦人、某、年齢不明、
此患者ハラウソング診セシ者ニシテ病歴等詳ナラズ、氏ハ其生前腺ノ腫脹ヲ見ズ、診斷不明ナルガ爲メニ予ニ解屍ヲ委囑セリ、依テ之ヲ檢スルニ

甚シク肥滿セル婦人ノ屍體ニシテ死後四時間ヲ過グ、刀ヲ下スノ前、直腸ニ於テ體温ヲ檢セシニ四十三度ヲ刻セル驗温ヲ昇リ盡セリ、而シテ屍ヲ解キテ又諸腺ノ腫脹セルヲ發見セリ、即チ左鼠蹊腺ハ豆大、右股腺ハ榛實大ニ腫脹シ軟ニシ且割斷面赤灰白色ヲ呈シ右側後腹腺、腸間膜腺亦共ニ腫脹ス、而シテ頸腺及ヒ氣管枝腺ニ絶エテ腫脹ヲ見ザリシモ顎下腺ハ軟ニシテ大サ豆大ニ達セリ、(他ハ畧ス)

第六例 日本人、金子キツ、十八歳、

(既往症) 六月十日以來寒胃ノ感アリテ身體違和、倦怠、食思不振等ノ諸候ヲ有セシガ十六日ニ至リ惡寒、發熱交モ往來シ同時ニ頭痛、惡心ヲ伴ヘリ、依テ二十一日入院セリ、



(現症) 二十二日、體格強壯、皮膚温潤、皮下脂肪組織、筋肉共ニ發育佳良、顔面潮紅、眼球光澤ヲ帶ブ、然レモ眼結膜ノ充血ヲ見ズ、舌ハ乾燥シテ帶黄白色ノ苔ヲ被リ咽頭ハ充血ス、脈搏百至、脈波大ニシテ緊張中等、呼吸不利、心臟ヲ檢スルニ右界ハ右胸骨線ニ達シ左界ハ乳線上ニ至ル、然レモ心音異常ナシ、脾臟肝臟共ニ肥大セズ、體温三十七度七分、此日患者身體違和、倦怠、惡心、眩暈等ヲ訴フ、然レモ頭痛ヲ有セズ、便通一回、(經過) 二十三日、此日血液ヲ檢シテ「ペスト」微菌ヲ發見セリ、

患者身神共ニ爽快ヲ覺エ食思稍振ヒ惡心去ル、舌滋潤、脾臟觸ル可カラズ、全身腺ノ腫脹ヲ認メズ、爾來漸々快方ニ赴キ數日ナラズシテ退院セリ、

以上掲ケ來リシ數例ハ以テ本症々候及ビ經過ノ一斑ヲ推察セシムルニ足ル可シ、而シテ最後ノ三例ハ已ニ述ブルガ如ク臨床上腺ノ腫脹ヲ發見スル能ハズ、患者又同部ノ疼痛ヲ感ゼザリシ者ナレモ其剖見セラレタル者ハ盡ク腺腫脹ノ存在ヲ發見セラレタリ、其他余ガ剖見セシ屍體ニ於テハ一モ腺ノ腫脹ヲ有セザル者アラザリキ、故ニ予ハ斷言ス「ペスト」患者ニシテ腺ノ腫脹セザル者ナシ

ト、而シテ臨床上問、之ヲ證ス可カラザル者アルハ或ハ腫脹セル腺ノ柔軟ニシテ患者肥滿ニ過ク
 ルガ如キ場合ニ於テ然リトス、然ルニ八月頃ニ至リラウソン氏等ハ腺腫脹ヲ有セザル數多ノ患者
 ニ接シタリトテ流行ノ末期ニハ腺ノ腫脹セザル者多シト言ヘリ、予ハ香港出立ノ前日「ケネヂイ
 タウン」病院ヲ訪ヒ日本人ニシテ腺ノ腫脹ナキ患者ヲ診セシニ「ペスト」ニアラズシテ腸窒扶斯ナ
 リ、予ハ又腺腫脹ヲ有セザリシト云フ小兒ノ屍體ヲ剖見セシ「アリシガ腫脹セル腺ニ代フル腸
 窒扶斯潰瘍ヲ見北里君ハ脾臟中ニ「チフス、パチルレン」ニ類セルモノヲ發見セリ、實ニ流行諸病
 ハ其末期ニ於テ症候ニ種々ノ變化ヲ來ス者ナレバ本症ニ於テモ亦病勢衰退スルニ從テ腺ノ腫脹劇
 甚ナラズ、從テ疼痛ヲ發セザルコトアル可シ、此時ニ當テ醫師ノ平生著シキ腺ノ腫脹及ヒ疼痛ヲ見
 ルニ慣レタル一日其甚シカラザル者ヲ見ルヤ細心注意シテ患者ヲ診セズ、爲ニ有テ以テ無トナス、
 實ニ有ル可キノ事柄タリ、況ヤ英醫ノ支那語ニ通セズ、而モ問診ノ周密ヲ缺キ病狀ヲ觀察スルノ
 粗漏ナルニ於テ「チフス」故ニ予ハ思ラク腸窒扶斯ニシテ腸ニ變化ナキ者ナク「ペスト」ニシテ腺ニ腫
 脹ナキ者ナシト、
 以上ノ他、予ハナホ數言ヲ補足シテ以テ症候ノ章ヲ結バント欲ス、本症ノ輕キ者ニアリテハ發病
 後三四日ヲ經テ熱度急ニ下降シ非常ニ發汗ス、故ニ此ノ如キ者ハ預後良ナリトハ古來諸家ノ唱導
 セシ所ニシテ予モ亦實ニ屢、此ノ如キ場合ヲ見タリ、然レモ大ニ發汗スルコトナクシテ輕快スル者モ
 亦尠カラズ、
 千四百年代及ヒ千八百三十六乃至八年間ニ印度ノバリニ於テ流行セシ「ペスト」ニハ咯血ヲ伴ヒシ
 者多カリシト雖モ今回ノ流行ニ於テハ予ハ一回モ之ヲ見タルコトナシ、今回ノ流行ノミナラズ古來

他ノ流行時ニ於テモ殆ト之ヲ見ザリシト云フ、而シテラウソンハ予ガ着港前二三回之ヲ見タルコト
 アリト語レリ、

皮膚ノ出血モ亦今回ノ流行ニ於テハ多ク見ザリキ、而シテ顔面、手足等ニ蚊刺ヲ蒙リ其痕充血或
 ハ出血シテ一見殆ト血斑ニ似タル者ハ多ク見タリ、然レモ其充血及出血セル所ハ衣服ニ蔽ハレザ
 ル所ナルヲ以テ容易ニ其蚊刺ノ痕跡ナルヲ察スルニ足ルナリ、

吐血ハ屢見タリ、然レモ其量多カラズシテ常ニ胃瘍ニ於ケル咖啡殘渣様ノ者ノミナリキ、
 腸出血ハ僅ニ一回見タルコトアリキ、

子宮出血ニハ一回モ遭遇セシコトナシ、然レモ時恰モ月經時ニ會セバ普通ノ際ヨリ出血多キハ數見
 聞セリ、

皮膚ノ發疹ニ付テハ蓄積診ハ一回モ見タルコトナシ、瘡瘡ハ間々之レヲ見タリ、而シテ其發スル快復
 期ニ於テスルヲ多シトス、其他全身ニ膿泡疹ヲ發セシ者ヲ見タリ、
 癰ハ一回見タルコトアリキ、又ハ又支那人ニシテ上腭ノ深峻ナル壞瘍ヲ有セル者ヲ見タリ、之レ恐
 クハ癰ナリシナラン、而シテ今回ノ流行ニハ瘍ヲ發セシ者多カラザリキ、

過 經

輕症「ペスト」ハ三四日ニシテ熱度下降シ腺ノ浸潤ハ漸次消退シ或ハ前ニ述ベシガ如ク一定時ヲ經
 テ化膿シ治癒スル者ナリ、
 重症「ペスト」ニ於テハ熱度多クハ一週日或ハ二週日ノ後下降シ腫脹ハ一定時ヲ經テ化膿シ治癒ニ
 就キ又多數ハ死亡ス、

ト、而シテ臨床上問、之ヲ證ス可カラザル者アルハ、或ハ腫脹セル腺ノ柔軟ニシテ患者肥滿ニ過ク
 ルガ如キ場合ニ於テ然リトス、然ルニ八月頃ニ至リラウソン氏等ハ腺腫脹ヲ有セザル數多ノ患者
 ニ接シタリトテ流行ノ末期ニハ腺ノ腫脹セザル者多シト言ヘリ、予ハ香港出立ノ前日「ケネヂイ
 タウン」病院ヲ訪ヒ日本人ニシテ腺ノ腫脹ナキ患者ヲ診セシニ「ペスト」ニアテズシテ腸窒扶斯ナ
 リ、予ハ又腺腫脹ヲ有セザリシト云フ小兒ノ屍體ヲ剖見セシ「アリシガ腫脹セル腺ニ代フル腸
 窒扶斯潰瘍ヲ見北里君ハ脾臟中ニ「チフス、バチルレン」ニ類セルモノヲ發見セリ、實ニ流行諸病
 ハ其末期ニ於テ症候ニ種々ノ變化ヲ來ス者ナレバ本症ニ於テモ亦病勢衰退スルニ從テ腺ノ腫脹劇
 甚ナラズ、從テ疼痛ヲ發セザルコトアル可シ、此時ニ當テ醫師ノ平生著シキ腺ノ腫脹及ヒ疼痛ヲ見
 ルニ慣レタル一旦其甚シカラザル者ヲ見ルヤ細心注意シテ患者ヲ診セズ、爲ニ有テ以テ無トナス、
 實ニ有ル可キノ事柄タリ、況ヤ英醫ノ支那語ニ通セズ、而モ問診ノ周密ヲ缺キ病狀ヲ觀察スルノ
 粗漏ナルニ於テ「ヤ、故ニ予ハ思ラク腸窒扶斯ニシテ腸ニ變化ナキ者ナク「ペスト」ニシテ腺ニ腫
 脹ナキ者ナシト、

以上ノ他、予ハナホ數言ヲ補足シテ以テ症候ノ章ヲ結バント欲ス、本症ノ輕キ者ニアリテハ發病
 後三四日ヲ經テ熱度急ニ下降シ非常ニ發汗ス、故ニ此ノ如キ者ハ預後良ナリトハ古來諸家ノ唱導
 セシ所ニシテ予モ亦實ニ屢、此ノ如キ場合ヲ見タリ、然レモ大ニ發汗スルコトナクシテ輕快スル者モ
 亦尠カラズ、

千四百年代及ヒ千八百三十六乃至八年間ニ印度ノバリニ於テ流行セシ「ペスト」ニハ咯血ヲ伴ヒシ
 者多カリシト雖モ今回ノ流行ニ於テハ予ハ一回モ之ヲ見タルコトナシ、今回ノ流行ノミナラズ古來

他ノ流行時ニ於テモ殆ト之ヲ見ザリシト云フ、而シテラウソンハ予ガ着港前二三回之ヲ見タルコト
 アリト語レリ、

皮膚ノ出血モ亦今回ノ流行ニ於テハ多ク見ザリキ、而シテ顔面、手足等ニ蚊刺ヲ蒙リ其痕充血或
 ハ出血シテ一見殆ト血斑ニ似タル者ハ多ク見タリ、然レモ其充血及出血セル所ハ衣服ニ蔽ハレザ
 ル所ナルヲ以テ容易ニ其蚊刺ノ痕跡ナルヲ察スルニ足ルナリ、

吐血ハ屢見タリ、然レモ其量多カラズシテ常ニ胃痛ニ於ケル咖啡殘渣様ノ者ノミナリキ、
 腸出血ハ僅ニ一回見タルコトアリキ、

子宮出血ハ一回モ遭遇セシコトナシ、然レモ時恰モ月經時ニ會セバ普通ノ際ヨリ出血多キハ數見
 聞セリ、

皮膚ノ發疹ニ付テハ蓄積診ハ一回モ見タルコトナシ、癩瘡ハ間々之レヲ見タリ、而シテ其發スル快復
 期ニ於テスルヲ多シトス、其他全身ニ膿泡疹ヲ發セシ者ヲ見タリ、

癩ハ一回見タルコトアリキ、又ハ又支那人ニシテ上膊ノ深峻ナル壞瘍ヲ有セル者ヲ見タリ、之レ恐
 クハ癩ナリシナラン、而シテ今回ノ流行ニハ瘍ヲ發セシ者多カラザリキ、

過 經

輕症「ペスト」ハ三四日ニシテ熱度下降シ腺ノ浸潤ハ漸次消退シ或ハ前ニ述ベシガ如ク一定時ヲ經
 テ化膿シ治癒スル者ナリ、

重症「ペスト」ニ於テハ熱度多クハ一週日或ハ二週日ノ後下降シ腫腺ハ一定時ヲ經テ化膿シ治癒ニ
 就キ又多數ハ死亡ス、

死ノ來ルヤ種々ナリト雖モ大約發病後二日乃至八日平均四日目ニ斃ル、者多シ、故ニ預後ノ不良ナル者ニハ腺ノ化膿セザル者多シ、之レ化膿ハ發病後八日乃至二週ニ來ルヲ例トスレバナリ、而シテ其後ニ斃ル、者ハ多クハ腺或ハ臟器ニ化膿ヲ起シ即チ膿毒症ヲ發スルニ由ル者多シ、本症患者ノ死因ハ概チ心臟麻痺ニシテ死前肺水腫ノ症候ヲ呈ス、又時トシテ腦麻痺ニ因リテ斃ル、者アリ、又間、患者昏睡ニ陥リ斷エズ嘔吐、痙攣シテ死スル者アリ、之レ恐ラクハ尿毒性ナラムカ、然レモ剖見ノ際、腦及腦膜ニ通例非常ノ充血及浮腫ヲ呈スルガ故ニ嘔吐、昏睡、痙攣ハ直ニ腦ヨリ來リシ者ナルヤモ知ル可カラズ、

一人ニシテ數回本症ニ襲ハレシ者ハ今回ノ流行中一回モ見聞セシコナシ、之レ「ペスト」ハ人ニ免疫性ヲ與フルニ由ルカ、是等ノ問題ハ寧ロ微菌學ノ範圍ニ屬スル者ナレバ北里君ハ他日之ヲ報告セラル、ナラム、

再發ハ一回モ見聞タルコナシ、

合併症

前房蓄膿 ヲ起セシ者ハ屢之ヲ見タリ、

黃胆 ヲ發セシ者ハ間、之レアリキ、而シテ其原因ハ十二指腸加答兒ナル可シ、予ハ一患者ノ高度ナル黃胆ヲ起セシ者ヲ解屍セシニ門脈ノ周圍ノ腺甚シク腫脹セルヲ見タリ、此場合ニ於テハ黃胆ハ胆管ノ腫脹セル腺ヨリ壓迫セラレタルニ因ル者ナラム、

皮膚 ニ多數ノ膿瘍及膿泡疹ヲ發セシ者アリ、其他鼠蹊腺ノ腫脹セル部ニ於テ皮膚壞疽ニ陥リシ者及ビ上腿ノ皮膚一般ニ壞疽ニ陥リシ者一名ヲ見タリ、

腎臟炎 本症ニ屢、發スル合併症ニシテ其現ル、發病後三四日ニ於テス、而シテ尿中ニ含有スル蛋白ノ量ハ多カラズ、又之ヲ顯微鏡下ニ檢スルニ顆粒圓柱、硝子樣圓柱、白血球、赤血球、脂肪球等ヲ見ル、然レモ浮腫ヲ伴フコト殆ト稀ナリ、

尿閉 之レ予ガ數回見聞セシ所ナリ、然レモ其原因ニ至リテハ明ナラズ、或ハ脊髓及脊髓膜ノ劇シキ浮腫ニ因由スルモノナランカ、

呼吸器 氣管枝加答兒、就下性肺炎ハ時々見タルコアリ、然レモ纖維素性肺炎ニハ一回モ遭遇シタルコナシ、肋膜炎ハ合併スルコトアレモ極メテ稀ナリ、

實扶的里 予ハ二三ノ咽頭及ヒ胃ニ實扶的里ヲ發シタル者ヲ目撃セシコアリ、

膿毒症 前ニ述ヘタルガ如ク屢、來ル者ナリ、

以上ノ他稀ニ痙攣及ヒ項直、強劇ナル吃逆、骨膜炎等ヲ發スルコアリ、又予ハ罹病中墮胎セシ者ヲ見タリキ、

死亡數

今回ノ流行ニ於テハ人種ニ由リテ死亡數ノ著シキ差アルヲ見ル、今表ヲ以テ之ヲ示サンニ

人種	英國人	歐亞雜種人	日本人	印度人	葡萄牙及支那人(ケチヤヒマニラ人イタクン病院)	支那人(支那病院)
死亡數	一六六%	一〇〇〇%	五四五%	六六六%	六〇〇%	七〇%
						九〇乃至八〇%

表中支那人ノ死亡數ニ至テハ種々ノ事情アリテ審ナラズ、然レモ死亡ノ比例尤モ多キハ支那人ナル

「疑フ可カラズ、之レ治療法ノ宜シキヲ得ザルト其營養ノ不良ナルニ由ル者ナラム、

病理解剖的所見

予ガ本章ニ於テ述ブル所ハ只ニ肉眼的ノ所見ニ過ギズ、夫ノ組織ノ顯微鏡的變化ノ如キハ充分檢

究ヲ遂ゲタルノ日ヲ待テ之ヲ報導ス可シ、

屍體ハ死後直ニ高度ノ強直ヲ起シ時トシテ「コレラ」ノ屍體ニ見ルガ如ク四肢之ガ爲メニ運動ス

ルヲアリ、屍斑モ亦死後倏チニシテ生ズ、然レモ劇シキ藍色ヲ呈スルハ稀ナリ、又屢、死後温體

ノ昇騰ヲ見ル、而シテ急ニ死セシ者ハ筋肉削瘦セズ、

腦支那人ノ頭骨ハ一般ニ厚クシテ板障ノ薄キヲ常トス、硬膜及軟膜ハ甚シク充血ス、而シテ軟

膜ニハ充血殊ニ強クシテ高度ノ浮腫ヲ呈シ間、血管ニ沿フテ潤濁ヲ見ル、然レモ膿浸潤ノ狀ヲ呈

セズ、又屢、溢血ヲ認ムルヲアリ、

腦ハ一般ニ浮腫ヲ呈シ且所々數多ノ血點ヲ見ル、腦室殊ニ側室ニハ稀ニ漿液ノ増加スルヲアル

モ其量甚多カラズ、又予ハ二回腦實質中ニ溢血ヲ見タルヲアリ、即チ一回ハ延髓ニ一回ハワロ

ルス氏橋ニ來リシ者ニシテ其大サ小豆大ナリキ、而シテ多量ノ溢血ニ至テハ一回モ之ヲ見タルヲ

ナカリキ、

脊髓軟硬膜、骨髓共ニ充血シ殊ニ軟膜ハ強キ浮腫ヲ有ス、然レモ溢血及正中溝ノ擴張ヲ見ズ、

肋膜ハ間、焮衝セル者アリ、然レモ溢血ハ殆ト稀ナリ、

肺ハ通例非常ニ充血シ又水腫ヲ呈シ之ヲ割斷スル時ハ氣泡ヲ含メル赤色ノ漿液多量ヲ出ス、稀

ニ就下性肺炎ヲ起セシ者アリシガ纖維索性肺炎及肺壞疽ハ一回モ見タルヲナシ、氣管枝粘膜ハ

充血シ間、加答兒ヲ呈ス、

心臟心包ニ屢、小出血點ヲ見ル事アリ、然レモ心包炎ヲ發シタル者ナシ、心臟ノ右室ハ甚シク擴

張シ多量ノ血液ヲ含ム、其狀一見脚氣ノモノニ似タリ、左室ニハ甚シキ肥大擴張ヲ認メズ、心

筋多クハ蒼白ニシテ潤濁シ又時々脂肪變性ヲ呈スル者アリ、瓣膜ハ殆ト常ニ異狀ヲ認メズ、而

シテ血液ノ心臟内ニ存スル者ハ濃厚ニシテ黯赤色ヲ呈スル流動體ノモノト凝血トナリ、

肝臟ハ通例肥大シ且充血ス、間、潤濁ヲ呈シ葉ノ境界明瞭ナラザル者多シ、而シテ其莢膜及實質中

ニ溢血ヲ呈スルヲアリ、胆嚢ハ通例胆汁ヲ含ム、

脾臟ハ通例非常ニ肥大シテ三四倍ニ達シ甚シク充血シ黯赤色ヲ呈シ實質極メテ軟ナリ、間、マル

ピイギ氏小體ノ非常ニ増大セル者アリ、又莢膜及ビ實質ニ出血ヲ見タルヲアリキ、而シテ時々脾

臟肥大シ灰白色ヲ呈シ甚硬固ナル者アリ。之レ以前「マラリヤ」ニ罹リシ者ナル可シ、

腎臟ハ通例大ニシテ劇シキ充血ヲ呈シ屢、潤濁ヲ呈シ皮質部増大ス、腎盂ノ粘膜ニハ殆ト常ニ出

血セル班點ヲ認ム、

胃粘膜ハ死後直チニ解屍セル者ニ於テ間、粘膜皺襞ヲナシ又潤濁セル者アリ、而シテ粘膜ニ小血斑

ヲ生ゼルハ殆ト常ニ見ル所ナリ、又予ハ粘膜ニ實質的里ヲ來タセシ者一名ヲ見タリ、

腸ハ通例一般ニ加答兒ヲ起シ粘液ノ分泌増加シ粘膜充血シ屢、點狀ノ溢血アリ、聚腺ハ腫脹シテ

蜂窩狀(或ハ網狀)ヲ呈シ其腫脹腸窒扶斯ニ於ケル髓樣腫脹ノ如ク甚シカラズ、決シテ潰瘍ヲ生

ズルヲナシ、孤腺ハ通例腫脹シテ粟粒大トナリ又稀ニ大豆大ニ達スルヲアリ、大腸ノ粘膜モ亦

概チ加答兒ヲ呈シ又孤腺ノ腫脹ヲ見ルヲアリ、

腸間膜及腹膜。ニハ屢、非常ニ大ナル出血アリ、然レモ一回モ腹膜炎ヲ起シタル者ヲ見ズ、而シテ

腸間膜腺ハ通例腫脹シ蠶豆大ニ達シ割斷面ハ髓色若クハ一般ニ薄紅色ヲ呈シ其質軟ナリ、

膀胱ノ粘膜ハ稀ニ出血ヲ呈スルコアリ、

咽頭ハ通例充血シテ黯赤色ヲ呈シ口腔粘膜及咽頭臚胞ノ腫脹セルモノアリ、扁桃腺ハ間、腫脹シ

テ赤色ヲ呈ス、予ハ一回壞疽性咽頭實扶的里ヲ起セシ者ヲ見タルコアリキ、

喉頭ノ粘膜ハ屢、加答兒ヲ起シ藍色ヲ呈シ又稀ニ破裂會厭鞅帶一側ニ水腫ヲ來タセル者アリ、

氣管枝腺ハ通例多ク黑色素ヲ有シ大ニ腫脹セル者稀ナリ其稀ニ腫脹セル者ハ割斷面薄紅色ヲ呈

ス、

腺。已ニ述ベシガ如ク全身ノ腺ハ殆ト「ペスト」ノ侵襲ヲ蒙ラザル者ナシ、而シテ或一處ノ腺主トシ

テ最モ初ニ最モ劇シク侵サル、者ナリ、予ハ左ニ鼠蹊腺ノ局所性腺腫脹ノ状態ヲ記シテ以テ腺

腫脹ノ一斑ヲ示サム、

腺ノ腫脹セル所ハ皮膚赤色ヲ帶ビ且浮腫ヲ呈ス、之レヲ切開スルニ皮下組織及皮下脂肪組織ヨ

リ魚膠狀ノ漿液ヲ泄ラス、而シテ皮下脂肪組織及腺ノ周圍ノ結締織ニハ通例出血性ノ焮衝或ハ細

胞浸潤ヲ見ル、腺ハ腫脹シテ之ヲ切開スルニ其實質中出血シテ班狀ニ黯赤色ヲ呈ス、腺ハ硬軟

其度ヲ殊ニシ間「已」ニ軟化シテ「ブルベイス」ナル者アリ、腺ノ腫脹ハ管ニ鼠蹊部ニ止マラズシ

テコ、ヨリ股輪ヲ通過シテ同側ノ骨盤内ノ腺ニ波及シ小骨盤内及ビ後腹膜腺ハ多クハ劇甚ナル

焮衝ヲ起シテ腫脹シ其周圍ノ結締織ニハ又焮衝、出血或ハ浸潤ヲ見ル、而シテ他側ノ腺ハ全ク變

化ヲ呈セサルカ或ハ之アルモ通例劇シカラズ、而シテ腋窩腺ニ局所性腺腫脹ヲ發スル時ハ殆ト常

腸間膜及腹膜。ニハ屢、非常ニ大ナル出血アリ、然レモ一回モ腹膜炎ヲ起シタル者ヲ見ズ、而シテ腸間膜腺ハ通例腫脹シ蠶豆大ニ達シ割斷面ハ髓色若クハ一般ニ薄紅色ヲ呈シ其質軟ナリ、膀胱ノ粘膜ハ稀ニ出血ヲ呈スルコアリ、咽頭ハ通例充血シテ黯赤色ヲ呈シ口腔粘膜及咽頭膿胞ノ腫脹セルモノアリ、扁桃腺ハ間腫脹シテ赤色ヲ呈ス、予ハ一回壞疽性咽頭實核的里ヲ起セシ者ヲ見タルコアリキ、喉頭粘膜ハ屢、加答兒ヲ起シ藍色ヲ呈シ又稀ニ破裂會厭鞅帶一側ニ水腫ヲ來タセル者アリ、氣管枝腺ハ通例多ク黑色素ヲ有シ大ニ腫脹セル者稀ナリ其稀ニ腫脹セル者ハ割斷面薄紅色ヲ呈ス、

腺。已ニ述ベシガ如ク全身ノ腺ハ殆ト「ペスト」ノ侵襲ヲ蒙ラザル者ナシ、而シテ或一處ノ腺主トシテ最モ初ニ最モ劇シク侵サル、者ナリ、予ハ左ニ鼠蹊腺ノ局所性腺腫脹ノ状態ヲ記シテ以テ腺腫脹ノ一斑ヲ示サム、

腺ノ腫脹セル所ハ皮膚赤色ヲ帶ビ且浮腫ヲ呈ス、之レヲ切開スルニ皮下組織及皮下脂肪組織ヨリ魚膠狀ノ漿液ヲ泄ラス、而シテ皮下脂肪組織及腺ノ周圍ノ結締織ニハ通例出血性ノ焮衝或ハ細胞浸潤ヲ見ル、腺ハ腫脹シテ之ヲ切開スルニ其實質中出血シテ斑狀ニ黯赤色ヲ呈ス、腺ハ硬軟其度ヲ殊ニシ間、已ニ軟化シテ「プルペイス」ナル者アリ、腺ノ腫脹ハ管ニ鼠蹊部ニ止マラズシテコ、ヨリ股輪ヲ通過シテ同側ノ骨盤内ノ腺ニ波及シ小骨盤内及ビ後腹膜腺ハ多クハ劇甚ナル焮衝ヲ起シテ腫脹シ其周圍ノ結締織ニハ又焮衝、出血或ハ浸潤ヲ見ル、而シテ他側ノ腺ハ全ク變化ヲ呈セサルカ或ハ之アルモ通例劇シカラズ、而シテ腋窩腺ニ局所性腺腫脹ヲ發スル時ハ殆ト常

ニ同側ノ鎖骨窩腺及頸腺ニ腫脹焮衝ヲ起ス者ナリ、腺ノ化膿ハ發病後十日前後ニ來ル者尤モ多シ、而シテ其化膿ハ腺ノ實質中ニ初マリ漸々其周圍ノ組織ニ及ボス者ナリ、故ニ化膿セル者ヲ切開スルニ明ニ其化膿竈ヲ腺實質中ニ證シ得ベキコアリ、又顯微鏡下ニ腺ノ一片ヲ檢スルニ許多ノ「ペスト」微菌ヲ見ル、而シテ此微菌ハ多ク淋巴隙ニ簇集シ血管及ヒ溢血中ニハ之ヲ見ルコト極メテ稀ナリ、予ハ此腺ノ組織的變化ニ就テハ他日ヲ待チテ詳論セムトス、

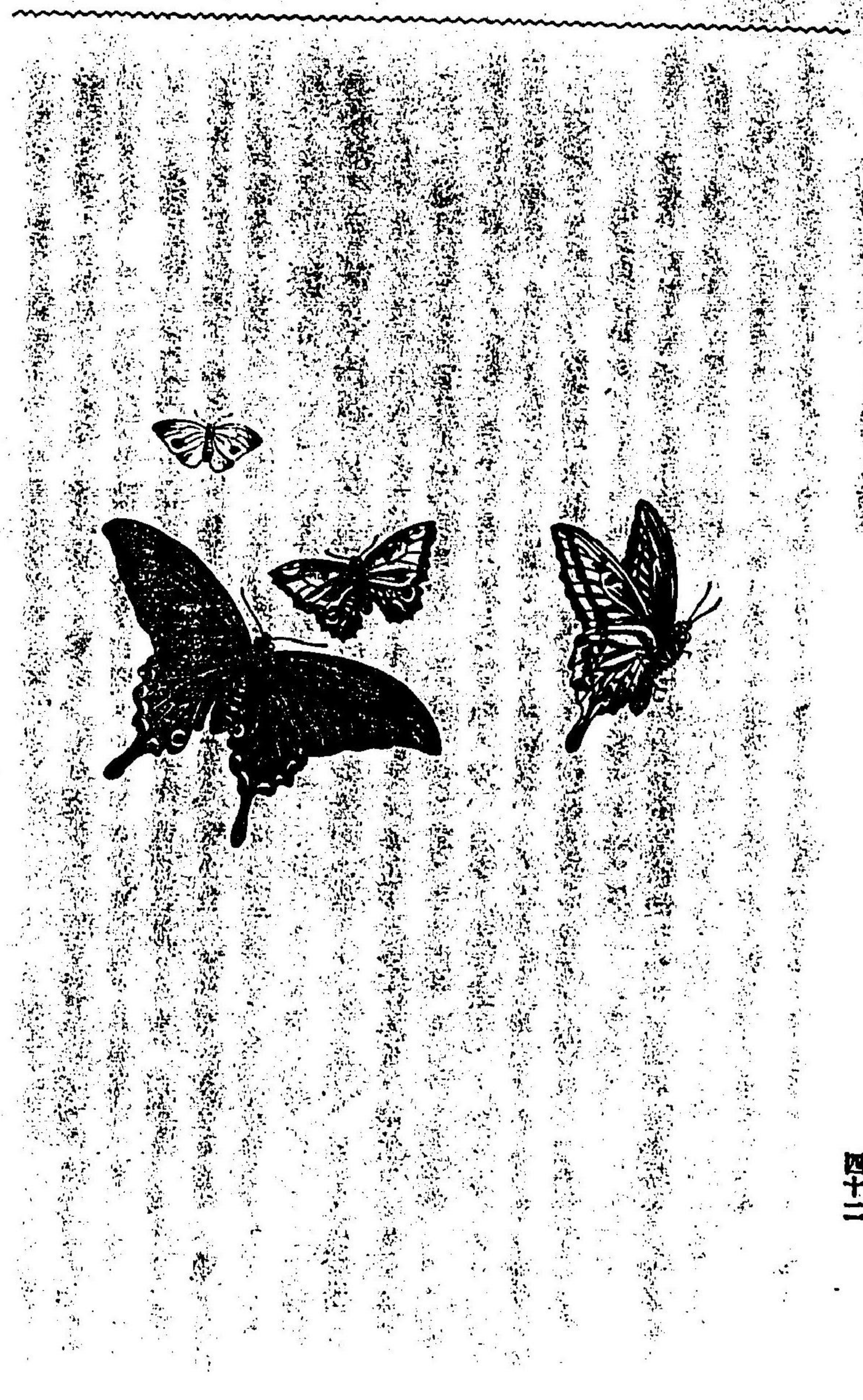
治療法

豫防法。我邦ノ如キ島國ニ於テハ流行地ヨリ來ル船舶ニ嚴重ナル檢疫法ヲ施シ該地發端時ヨリ一週日ヲ經ルニアラザレバ人及ビ荷物ヲ上陸ヲ許サル可シ、之レ本症ノ潜伏期ハ曩ニ述ベシガ如ク一週日以上ナル事稀ナレバナリ、

治療法。藥劑ノ本症ニ特效アル者ハ未ダ之ヲ知ラズ、而シテ先ニ述ブルガ如ク本症ノ死因ハ通例心臟麻痺ニアルヲ以テ始メヨリ注意シテ實答利斯、「アンモニヤ」劑等ノ心臟機能ヲ興奮セシムル藥劑ヲ與ヘ頭及心臟部ニ水袋ヲ施シ又多量ノ酒精飲料ヲ與フルヲ良トス、又口渴ニハ茶、コリモノアデ等ヲ與フ可シ、予ハ此略報ヲ終フルニ當テ助手宮本、學生木下二君及ビ香港領事中川君ニ向テ予ガ爲ニ多クノ補助ヲ與ヘラレタルヲ謝ス、

(完)

62
61





62
61

前期醫學部
系録
香港
北里
柴三郎
著
ペスト病原因調査報告
第一卷

059466-000-3

62-61

ペスト病ノ原因調査第一卷報告

北里 柴三郎ノ著

M27

CBF-0335

